

漢鏡 5 期における淮派の成立

岡村 秀典

はじめに

さきに筆者は後漢鏡の編年を組み立て、それを 3 期に大別した〔岡村 1993〕。後漢前期の 1 世紀第 2 四半期から後半にかけての漢鏡 5 期は、前漢末期の漢鏡 4 期に引きつづき、四神などの瑞獸を細線であらわした方格規矩四神鏡や獸帶鏡、扁平で幾何學的な紋様の内行花紋鏡が流行し、後れて浮彫表現の盤龍鏡や獸帶鏡があらわれた。つづく 2 世紀前半の漢鏡 6 期は、南中國では東王公・西王母や龍虎などの神獸を浮彫であらわした畫像鏡や神獸鏡が出現し、北中國では扁平な紋様の蝙蝠座内行花紋鏡や雙頭龍紋鏡がおこなわれた。

この編年をうけて上野祥史は、漢鏡 5 期から 6 期にかけて流行した盤龍鏡〔上野 2003〕と漢鏡 6 期から 7 期にかけての畫像鏡〔上野 2001〕を分析し、華北東部地域や錢塘江流域などの地域系列に分けた。また、岸本泰緒子〔2006〕は漢鏡 5 期に浮彫式獸帶鏡の製作系統が多様化したことを明らかにした。

従来は、型式學にもとづいて鏡を編年し、型式の出土分布にもとづいて製作地を推定してきた。しかし、魏の年號をもつ三角縁神獸鏡が海をこえた日本の古墳からのみ出土し、「廣漢西蜀」「尙方」の製作を記した鏡が、現地の四川省からほとんど出土せず、長江中流域や遠く北朝鮮に分布しているという事實に明らかのように、みかけの出土分布から製作地を推定することには危険がともなう。そのいっぽう、青銅器工人が一か所にとどまって鑄造していたとはかぎらない。戰國時代の楚では「鑄客」と呼ばれる他國の工人が楚王室の青銅器を鑄造し、楚様式の山字紋鏡の鑄型が遠く河北省易縣の燕下都遺址から出土している〔岡村 2008 b〕。また、漢鏡 2 期には都の長安で各種の華西鏡群が生産されたが、その後半期に草葉紋鏡をつくる一部の工人が長安から山東の臨淄に移動して短期間の操業にたずさわっている〔岡村 2008 a〕からである。とりわけ、鏡のように比較的簡単な構造で、民間にひろく流通したものは、小經營の工房でもたやすく鑄造された。本稿でおもに論じる漢鏡 5 期は、官營工房とされる「尙方」が衰退し、商號や個人名を銘文の冒頭に掲げて「珍奇鏡」や「世少有」をうたう斬新な圖像紋様や銘文の鏡がつくられたから〔岡村 2008 b〕、性急に製作地を推定することよりも、作鏡者名を手がかりに、それぞれの作鏡動向を追跡す

るのが先決であろう。

本稿では、そうした漢鏡5期を代表する作鏡者として、「尙方」から獨立し、新しい意匠の獸帶鏡・盤龍鏡・畫像鏡を生みだした淮派をとりあげる。製作の中心地と推定する淮南は、かつて戦國末期に楚の國都となり、前漢代には淮南國として榮えたところで、戦國時代から前漢代にかけて淮式(Huai style)と呼ばれる特徴的な青銅器を生産している〔Karlb-
eck 1926/Karlgren 1941〕。その後、前漢末期の漢鏡4期には江南の丹陽に産する銅を用いた「漢有善銅出丹陽」銘や官營工房の「尙方」作をうたった鏡をつくっている。後漢章帝の章和年間(87-88)盤龍鏡(六安135)をつくった「淮南龍氏」をはじめ、本稿でとりあげる「青蓋」・「杜氏」・「呂氏」・「石氏」・「池氏」らは、まさしくこの傳統をうけついで淮派にほかならない。

表1には漢鏡5期の淮派を特徴づける銘文をとりあげ、参考として「紀A」から「紀C」まで3面の紀年鏡銘をそのあいだに挿入した。かつて樋口隆康〔1953〕は、前漢から魏晉代にいたる代表的な銘文29種を選別し、鏡式との相關を分析することによって銘文が時期ごとに變化することを明らかにした。表1のうち銘文501~506・538が樋口分類のLとその變異形、銘文507がPa、銘文542がNの變異形だが、それ以外の大部分はこの範疇ではとらえられない獨特の銘文である。作鏡者名を銘文に署すようになった漢鏡5期は、民間の購買者に向けてまさに「作品」としての個性をアピールしようとした時代であった。したがって、本稿はこれまでのように考古學の型式分類によって鏡やその銘文を機械的に類型化してとらえるのではなく、また美術史の地域様式〔植山2005〕のように地域の流派をひとまとめにとらえるのでもなく、「作品」ひとつひとつの個性と向きあうことによって、藝術家としての鏡工の作鏡動向を注視する方法論を新たに提唱しようとするものである。

表1 漢鏡5期銘文一覽

501	尙方作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親樂富昌。宜侯王兮。
紀A	尙方作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。上有佚人不知老。渴飲玉泉飢食棗。永平七年九月造眞。
502	尙方作竟大母傷。巧又刻之成文章。八禽九守更爲倡。壽如大山樂未央。浮游天下救四方兮。
503	尙方作竟大母傷。商周連出建四方。白虎辟耶居中央。子孫順息富貴昌。壽如金石。
504	尙方作竟善無傷。六子九孫在中央。左龍右虎辟不羊。巧工刻之成文章。
505	尙方作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親樂富昌。壽敝金石如侯王。青蓋爲志何巨央。
506	青蓋作竟大母傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。長保二親樂富昌。壽敝金石如侯王。
507	青蓋作竟自有紀。辟去不羊宜古市。□□□□壽命久。保子宜孫得好。爲吏高官車生耳。
508	田氏作竟大母傷。新有善同出丹陽。澗冶銅錫清如明。得此竟家賞千萬。
509	陳氏作竟大母傷。漢有善銅出丹陽。和以銀錫清且明。左龍右虎主四彭。朱鳥玄武順陰陽。
510	陳氏作竟日有熹。令人陽遂貴復富。□□細守各自治。左有青龍來福祐。白虎居前□白事。鳳□□□□□□。□□□□造工□。
511	侯氏作竟大母傷。巧工刻之爲文章。左龍右虎辟不陽。七子九孫居中央。夫妻相保如威央兮。

- 512 張氏作竟大毋傷。長保二親樂未央。八子九孫居高堂。左龍右虎主四旁。朱鳥玄武仙人羊。爲吏宜官至侯王。上有辟邪去不陽。從今世昌。
- 513 張是作竟大無傷。白虎青龍辟不詳。朱鳥玄武順□□。八子九孫富貴昌。長保二親樂未央。宜侯王。
- 514 張氏作竟宜侯王。家當大富樂未央。子孫備具居中央。長保二親世世昌。爲吏高遷帶青黃。
- 515 池氏作竟大毋傷。天公行出樂未央。左龍右虎居四方。子孫千人富貴昌。
- 516 池氏作竟有精神。上大山見仙人。持芝草語吾道。此竟好可自保。倉龍白虎主除道兮。長宜子孫保二親。宜侯王富貴昌。
- 517 池氏作竟真大巧。上有王僑赤甬子。令人陽遂不知老兮。
- 518 華氏作竟宜侯王。家當大富樂未央。子孫備具居前行。長保二親，辟邪含和除凶。所未得。仙人王僑赤松子。食兮。
- 519 李氏作之竟誠清明。服之富貴壽命長。左龍右虎扶兩旁。朱爵玄武從陰陽。單于來臣至漢疆。子孫蕃息樂未央。
- 520 成平倚竟兮，世間未嘗有。蒼龍在左，白虎居右。爲吏高升賈萬倍。長保二親樂無已。
- 521 石氏作竟世少有。倉龍在左，白虎居右。仙人子僑，以象於後。爲吏高升賈萬倍。辟去不詳利孫子。千秋萬歲生長久。
- 522 尙方作竟世少有。倉龍在左，白虎居右。爲吏高升賈萬倍。胡虜殄滅去萬里。辟去不羊利孫子。長保二親樂無已。□甥萬人兮。
- 523 尙方作竟佳且好。子孫備具長相思。上有神仙采芝草。令人富貴不知老。
- 524 尙方作竟佳且好。左龍交右白虎。前有朱鳥後玄武。令人富貴宜孫子。山人王僑赤相子。千秋萬世不知老。
- 525 尙方作竟佳且好。白虎辟耶居中道。家室富昌宜孫子。以爲身保。
- 526 尙方作竟大眞工。嫁入門時殊大良。夫妻相重，甚於威央。五男三女，富貴昌清。
- 527 □月吉日，造此倚物。二姓合好，□如□□。女貞男聖，子孫充實。姊妹百人，□□□□。夫婦相□，□□□□兮。
- 紀 B 元和三年，天下太平。風雨時節，百□□□。□□□□，□□□□。尙方造竟，在於民間。有此竟，延壽未央兮。
- 528 尙方名工，杜氏所造。凍治銅錫，佳而且好。辟耶天祿，奇守竝有。萬里□間，□□□有。服此鏡者，富貴長壽。男爲□侯，女□□□。
- 529 遺杜氏造珍奇鏡兮，世之眇徹。名工所刻畫兮，凍五解之英華畢。畢而無極兮。辟耶配天祿。奇守竝來出兮。三鳥與□□□□，得所欲。吏人服之曾秩祿。大吉利。
- 530 杜氏作珍奇鏡兮，世之未有兮。凍五解之英華畢。畢而無極兮。上西王母與玉女，宜孫保子兮。得所欲。吏人服之曾官秩。白衣服之金財足。與天無極兮。
- 531 杜氏作鏡善毋傷。和以銀錫清且明。名工佳造成文章。辟耶天祿居中央。十男五女樂富昌。居無憂兮如侯王。
- 532 杜氏作竟大毋傷。家有善銅出丹羊。凍治銀錫清如明。左龍右虎辟不陽。長富樂未央。
- 533 佳鏡兮樂未央。辟耶天祿居中央。杜氏所作成文章。服之吉利富貴昌。子孫備具金甫堂。傳之後世以爲常。男封列侯皆令。
- 534 原夫始萌兮，五解英華畢。分而無極兮。辟耶宜□，上有奇守，出中三鳥，□□□□。宜孫保子，各得所欲。吏人服之，胡氏作。
- 535 原夫作鏡，華畢分而無極兮。上有辟耶與天祿。宜孫保子，各得所欲。吏人服之益官秩。白衣服之金財足兮。胡氏作。
- 536 胡氏作鏡四夷服。凍五之英華畢。□□□兮。上有奇守出中央。長吏服之益官秩。白衣服之□□□。□□□□。
- 537 呂氏作鏡樂無亟。與天相保順陰陽。長吏服之曾官秩。白衣服之宜孫子。上有仙師赤甬子。
- 538 呂氏作鏡善無傷。工右刻之成文章。左龍有虎辟不羊。朱爵玄武順陰陽。八子九孫居中央。家當大八千萬。
- 539 呂氏作鏡清且明。上下憲天有大光。史尹服之壽命長。八子九孫居中央。服鏡者奴卑千人，宜弟兄。
- 540 呂氏作鏡自有紀。長保二親□孫子。辟去不羊宜古市。爲吏高升居人右。壽如金石。
- 541 朱氏作珍奇鏡兮，世間未嘗有。白牙鼓鳴琴兮，子其傷其子。動弦合商時。泣下不可止。僑誦。
- 542 龍氏作竟大無傷。采取善同出丹楊。和以良易清且明。刻畫奇守成文章。距虛辟耶除羣凶。師子天祿會是中。長宜子孫大吉羊。／(內圈) 上有辟耶交龍。道里通。長宜子孫壽無窮。
- 紀 C 隆帝章和時，淮南龍氏作竟，凍治同。合會銀易得和中。刻畫雲氣龍虎虫。上有山人壽無窮。長保二親樂不亨。
- 543 龍氏作竟四夷服。多賀君家人民息。胡羌除滅天下復。風雨時節五，官位尊顯蒙祿食。長保二親樂無已。
- 544 三鳥作竟與衆異。黍子百孫得天力。貴至三公尙御竟，壽如金石樂無極。
- 545 八維此鏡兮與衆異。七子九孫各有喜。官至公卿中尙寺。上有東王父西王母。令君陽遂不知老兮。
- 546 宋氏作竟自有意。□□□□文字。采取銅錫與衆異。服□必尊宜作吏。子孫備具家大富。士至公卿中常侍。辟命迫之誠可喜。擇時日家大富。

1. 「尙方」から分かれた「青蓋」

漢鏡5期を代表する鏡のひとつが、四神をはじめとする瑞獣を細線であらわした方格規矩四神鏡である。銘文は樋口分類の銘文Kがもっとも多く、銘文LやNが少数あり、ほとんどが「尙方作」となる。「尙方」とは、『續漢書』百官志三に帝室財政を管轄する少府の屬官として尙方令があり、「本注曰、掌上手工作・御刀劍・諸好器物。」とある。宮廷で用いる精巧な器物や武器類をつくる官營工房が「尙方」であった。漢鏡4期の鏡に「尙方御竟」や「尙方作竟」という銘文が出現し、2世紀には武器の銅弩機に「中尙方監作」の銘文があらわれ、それが裏づけられる〔岡崎1965〕。

この方格規矩四神鏡と並んでおこなわれたのが獸帶鏡である。この2種の鏡式は、四神をはじめとする瑞獣を細線であらわした主紋が共通している。しかし、本来の方格規矩四神鏡は、鈕座の方格に方位をあらわす十二支の銘文があり、それにあわせて四神が配置されているのに対して、圓形の鈕座をもつ獸帶鏡にはそうした方位の規制がなく、四神をはじめとする瑞獣は自由に配置されているというちがいがあある。

細線式の獸帶鏡は、外區に鋸齒紋をいれたグループと獸紋や流雲紋などをもつグループとに大別される。外區の鋸齒紋とは、正確には鋸齒紋+複線波紋+鋸齒紋という三重の紋様帯をもつ鋸齒紋a〔岡村1993〕のことである。漢鏡5期の「尙方」方格規矩四神鏡は、ほとんどがこの外區紋様をもち、四神を主紋とするものから鳥紋だけのものに簡略化するプロセスをたどる。このなかで「尙方」工房において、四神の宇宙観にとらわれない獸帶鏡のほうに製作の重心が移っていった。その「尙方」が宮廷御用品をつくる官營工房であるのか、それとも民間で「尙方」を詐稱したのかはともかく、漢鏡5期前半において「尙方」の銘文をもつ方格規矩四神鏡と細線式獸帶鏡とは、かなり近い関係のもとで製作され、壓倒的なブランド力で市場を席卷していたことは確かである。

漢鏡5期の獸帶鏡は、細線表現のものから浮彫表現のものが分化した。圖像を浮彫であらわすことは、まず細線式獸帶鏡の盤龍座にはじまり、後れて主紋の浮彫化が進んだ。盤龍座の細線式獸帶鏡はおおよそ1世紀第3四半期、浮彫式獸帶鏡の出現は1世紀第4四半期である。結論からいえば、これは鏡市場を席卷していた「尙方」が瓦解し、その鏡工たちがばらばらに自立してゆく動きと連關している。本章では、その第1段階として、細線式獸帶鏡において「尙方」から「青蓋」が分立したことを論じる。

銘文505～507にみえる「青蓋」について、カールグレン(K120)は緑色の吉祥なる金屬をあらわす「青羊(祥)」とし、笠野毅〔1993〕は作鏡工房の商號と考えた。兩説を斟酌すれば、「青蓋」は吉祥語を雅號とする工房名とみなしうる。その「青蓋」工房は、どのようなプロセスをへて「尙方」から成立したのだろうか。

圖 1-1 「尙方」鏡 (小校 15-28) は, 岡村 [1993] 分類の細線式獸帶鏡 IV A 式で, 銘文 501 をもつ。圓座乳で 7 區畫に分けた主紋には, 銘文にある四神の左龍 (青龍)・右虎 (白虎)・朱鳥 (朱雀)・玄武のほか, 龍や一角獸などが配置されている。青龍には太陽と羽人が, 白虎には月と小鳥が配されるなど, 方格規矩四神鏡 IV 式に類似する圖像表現をもつ。浮彫であらわされた盤龍座は, 右に一角龍, 左に虎が口を大きく開いて對峙し, 足元の右には浮彫表現の龜, 左には細線表現の小鳥が配されている。

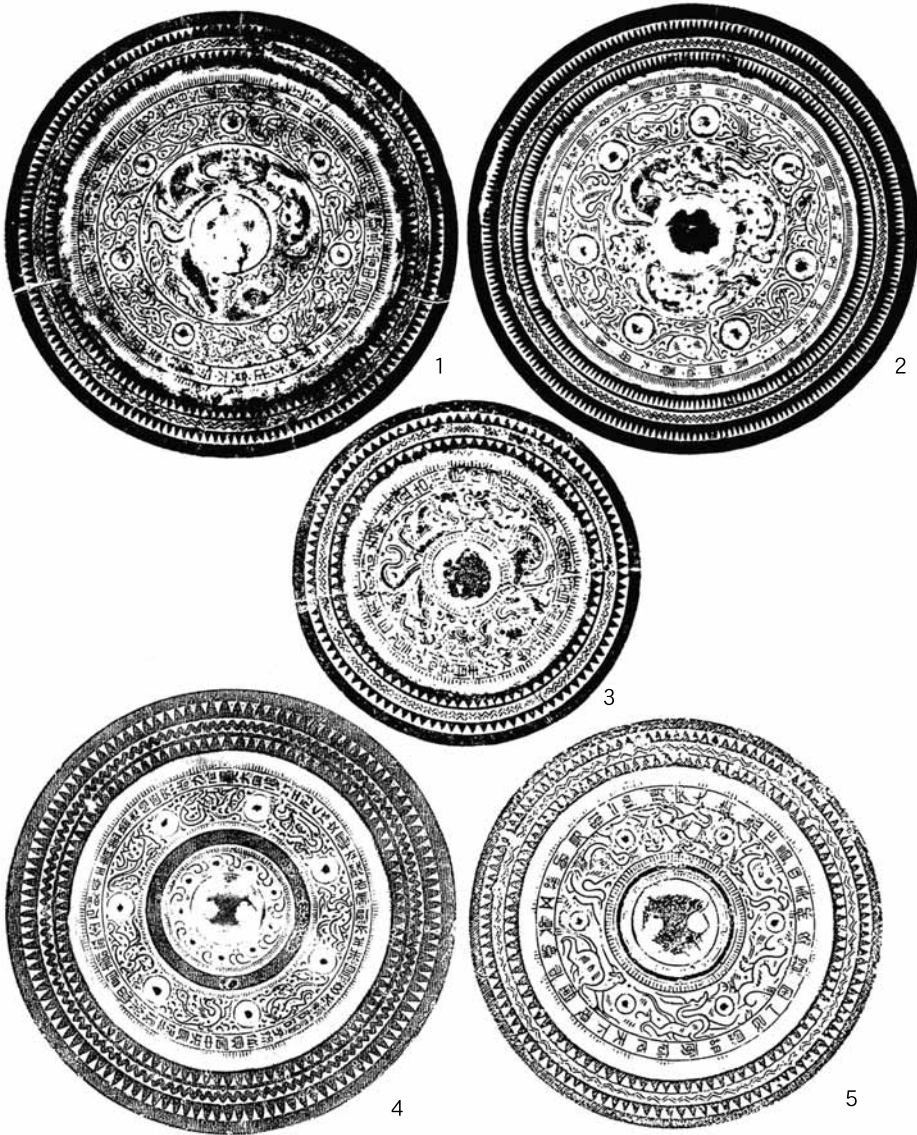


圖 1 「尙方」と「青蓋」の鏡 縮尺不同 (1 小校 15-28, 2 小校 15-58, 3 郭清華 1985, 4・5 岡村拓本)

圖1-2「青蓋」鏡(小校15-58)は、圖1-1「尙方」鏡と紋様構成が似ているが、大きな圓座乳で區畫された主紋は、四神のうち白虎が脱落して一角獸に置換し、小鳥などは省略されている。四神の宇宙觀がくずれはじめた細線式獸帶鏡IVB式である(岡村〔1993〕論文でIVA式としたのは誤り)。その銘文506は起句の前に四點記號があり、圖1-1「尙方」鏡の銘文501より4字だけ減少している。盤龍座は、右に雙角の龍、左に虎が口を大きく開いて對峙し、鈕の反對側にも雙角龍の上半身があらわされている。湖北省鄂州市鄂鋼630工地の「青蓋」鏡〔湖北省博物館ほか1986:圖24〕は、これと同じ圖像表現と構成をもち、銘文506に「子孫備具居中央」を加えた7句からなる。これにたいして北朝鮮ピョンヤン市貞柏里2號墓の「青蓋」鏡〔梅原ほか1959:圖版57〕は、これと完全に同銘だが、鈕座は對峙する龍虎が2組ある盤龍紋、主紋は四神がそろい、圖1-1「尙方」鏡にみるような小鳥をもつ細線式獸帶鏡IVA式である。ただし、外區の唐草紋と四葉紋乳はめずらしく、後述の「龍氏」など「尙方」に屬した別工人の關與を推測させる。

圖1-3は陝西省勉縣老道寺3號墓から出土した「青蓋」盤龍鏡〔郭清華1985〕である。圖1-1「尙方」鏡の盤龍表現と同じように、右に一角龍、左に虎が口を大きく開いて對峙し、足元には浮彫の龜と小鳥が配されている。岡村〔1993〕分類の盤龍鏡IA式に屬している。その銘文は圖1-2「青蓋」鏡と同じように起句の前に四點記號があり、樋口分類の銘文Pa、表1の銘文507の變異形で、

青蓋作竟自有紀。辟去不羊宜古市。長保二親利孫子。爲吏曾秩壽命久。

となる。反對に、浙江省紹興縣出土の「尙方」盤龍鏡(浙江修訂88)は、これとほぼ同じ盤龍表現で、浮彫の龜をとまない、岡村分類の盤龍鏡IA式である。銘文も同じ樋口分類の銘文Paである。このように盤龍鏡の製作においても、細線式獸帶鏡IVA・IVB式に並行する段階に「尙方」と「青蓋」とは近い關係にあったことがわかる。

その關係を具體的に示すのが岐阜縣大野町城塚古墳出土と傳える圖1-4の細線式獸帶鏡である。古墳は6世紀に下り、鏡の紋様や銘文には踏み返しの痕跡が認められるが、原鏡は漢鏡5期の細線式獸帶鏡IVA式でまちがいない。その銘文505は「尙方作」を冒頭にかかげ、第7句までが上述の細線式獸帶鏡とほぼ同じだが、末句に「青蓋爲志何巨央」と「青蓋」の志が大きいことを自讃する。つまり、このとき「青蓋」は所屬する「尙方」の名をかかげ、銘末にみずからの志を控えめに記したのである。圓座乳で區畫された内區主紋は、銘文にある四神があらわされたほか、一角獸や羽人には小鳥や蟾蜍が配されている。表現の精粗からみれば、圖1-1「尙方」鏡と圖1-2「青蓋」鏡とのあいだに位置づけられ、「尙方」工房から「青蓋」を立ちあげる直前の段階にあることを示している。

浙江省紹興出土と傳える永平七年(64)細線式獸帶鏡(巖窟2中)は、圖1-4「尙方」鏡とほぼ同じ紋様表現と構成をもつ。外區に鋸齒紋、鈕座に乳帶紋をいれ、内區は圓座乳で

區畫し、四神のほか一角獸や羽人などを配している。その紀年銘Aは圖1-4「尙方」鏡の銘文505より6字少なく、紀年のほか樋口分類の銘文Lが4句と銘文Kが2句からなる。圖1-4の原鏡はこれとほぼ同時期と考えられ、「尙方」のなかで「青蓋」が立ちあがったのは、およそ紀元後60年代に位置づけられよう。

圖1-5は五島美術館蔵の「青蓋」獸帶鏡で、樋口分類の銘文Nが5句めぐらされている。鈕座の乳帶紋は消失し、圓座乳で6區畫に分けた主紋は、四神の玄武が脱落し、その表現も簡略化している。岡村分類の細線式獸帶鏡IVB式に屬し、方格規矩四神鏡と同じように形式化の方向に進んでいる。

漢鏡5期前半の「尙方」は、鋸齒紋の外區をもち、四神をはじめとする瑞獸を主紋とする方格規矩四神鏡をつくり、製作地の異なる内行花紋鏡と並んで鏡市場の一半を獨占していた。鈕座から十二支銘の方位が消え、四神の一部が脱落するなど、方格規矩四神鏡にマンネリズムの傾向があらわれたとき、「尙方」では四神の宇宙觀にとらわれない獸帶鏡に生産の比重を移すようになる。その細線式獸帶鏡のなかで斬新な意匠としてあらわれたのが、浮彫表現の盤龍座であり、それを主紋とする盤龍鏡が創作されたのである。また、方格規矩四神鏡が小型化していくなかで、徑20cmをこえる大型の細線式獸帶鏡がつくられたのも、この時期である。このような「尙方」鏡の改革を主導したのが「青蓋」であった。圖1-4「尙方」鏡の銘末に記した「青蓋爲志何巨央」は、その氣概を高らかに宣言したものにほかならない。このように「尙方」の看板のもとで獸帶鏡や盤龍鏡を創作した「青蓋」であるが、まもなく「尙方」のブランド力を見限って銘文の冒頭に「青蓋作」をかかげるようになった。

しかし、その氣概は長つづきしなかった。圖1-5「青蓋」鏡のように「尙方」と同じマンネリズムの道をたどったのである。ところが、この「青蓋」の自立をきっかけとして堰を切ったように「尙方」から鏡工が相ついで獨立していった。つぎにそのひとつ「杜氏」の動向をみることにしよう。

2. 「尙方」の「名工杜氏」の自立

圖2-1は1200年ごろの瀋陽市小北街2號墓から出土した「杜氏」盤龍鏡〔瀋陽市文物考古研究所2006〕である。岡村〔1993〕分類の盤龍鏡IB式で、かりに遼金代の踏み返し鏡であっても、原鏡はまちががなく漢鏡5期である。報告では銘文の誤釋がいくつかあり、拓本をもとに正したのが銘文528である。冒頭の「尙方名工，杜氏所造」に明示されるように、このとき作鏡者の「杜氏」はまだ「尙方」に所屬していた。圖1-4「尙方」鏡の銘末に「青蓋爲志何巨央」と記した「青蓋」と同じように、「杜氏」はこのとき「尙方」の看板

をかかげつつ、みずから「名工」であることを高らかに宣言したのである。

七言句の銘文が主流を占める漢鏡5期のなかで、この銘文528のほか、銘文527や廣西壮族自治区梧州市旺步2號墓から出土した元和三年(86)「尙方」浮彫式獸帶鏡〔廣西壮族自治区博物館2004：圖51〕の紀年銘Bなどが整った四言句となっていることも重要である。そもそも四言句は儒教經典の『詩經』に由來する詩形で、儒家の好む古雅なる趣きがあるだけでなく、銘文527の「二姓合好」や「女貞男聖」、元和三年鏡(紀B)の「天下太平。風雨時節」などは、後漢社會に根づきつつあった儒家の禮教主義を反映した文言である。本鏡の銘文528にそうした四言句を採用したのは、「尙方」鏡のマンネリズムを變革しようとする作鏡者「杜氏」の進取の氣概をあらわしたものであろう。このことからみるならば、元和三年鏡の「尙方造竟，在於民間」という銘文もまた、たんに「尙方」の鏡が民間に流通したというよりも、「杜氏」のような「尙方」所屬の鏡工が民間の市場に向けて鏡を製作したという積極的な意味がこめられている。

つづいて「杜氏」が製作したのが、浙江省博物館藏の圖2-2 盤龍鏡(浙江92)である。その銘文529は三言・四言・五言・七言句からなる雜言體で、冒頭に「遺杜氏造珍奇鏡兮」と記している。「遺」は最初に本鏡を紹介した王士倫〔1957：圖37〕の釋で、「遺」では意味が通らないという陳直〔1963〕の指摘にしたがいが、浙江92では「上虞杜氏」と改めたが、字形はまちがいがなく「遺」である。光武英樹の教示によれば、「遺」は「隨」の假借で、『詩經』小雅・角弓の「莫肯下遺」の鄭玄箋に「遺，讀曰隨。」とある。章和年間(87-88)盤龍鏡の紀C「淮南龍氏」のように、「隨杜氏」は「地名+姓氏」の表記であろう。地名としての「隨」は南陽郡隨縣で、漢武帝のとき御史大夫となった杜周は同郡杜衍の人。「杜氏」は南陽の「隨」から淮河流域に移住し、「尙方」の看板のもとに圖2-1 鏡を製作したが、まもなく「尙方」のブランド力に見切りをつけ、「青蓋」の例にならって自立し、製作した作品が本鏡であろう。ただし、「尙方」所屬のときから「名工」を自稱していた「杜氏」は、「青蓋」のような商號ではなく、自分の姓をそのまま名のった。「青蓋」鏡は盤龍紋などの新しい圖像紋様を採用したとはいえ、全體として「尙方」鏡を踏襲するところが多かったのにたいして、「杜氏」の作品にはみずから「名工」の「珍奇鏡」と誇示するだけの強い創作意欲を感じとることができる。

その銘文529は、缺損する第8句をのぞいて、すべて入聲で合韻し、雜言體であることとあわせ、まことに「珍奇」な銘文である。これは圖2-1「尙方名工杜氏」鏡の銘文528と字形や「名工」「辟耶(邪)」「天祿」「奇守(獸)」など例の少ない一部の語句が共通することから、「杜氏」による一連の作品とみてまちがいない。「杜氏」が「尙方」に属していたときは古雅な趣きをもつ四言句を採用し、そこから自立したときには入聲で合韻する雜言體の銘文を創作したのである。そこにも「杜氏」鏡の新機軸があらわれている。

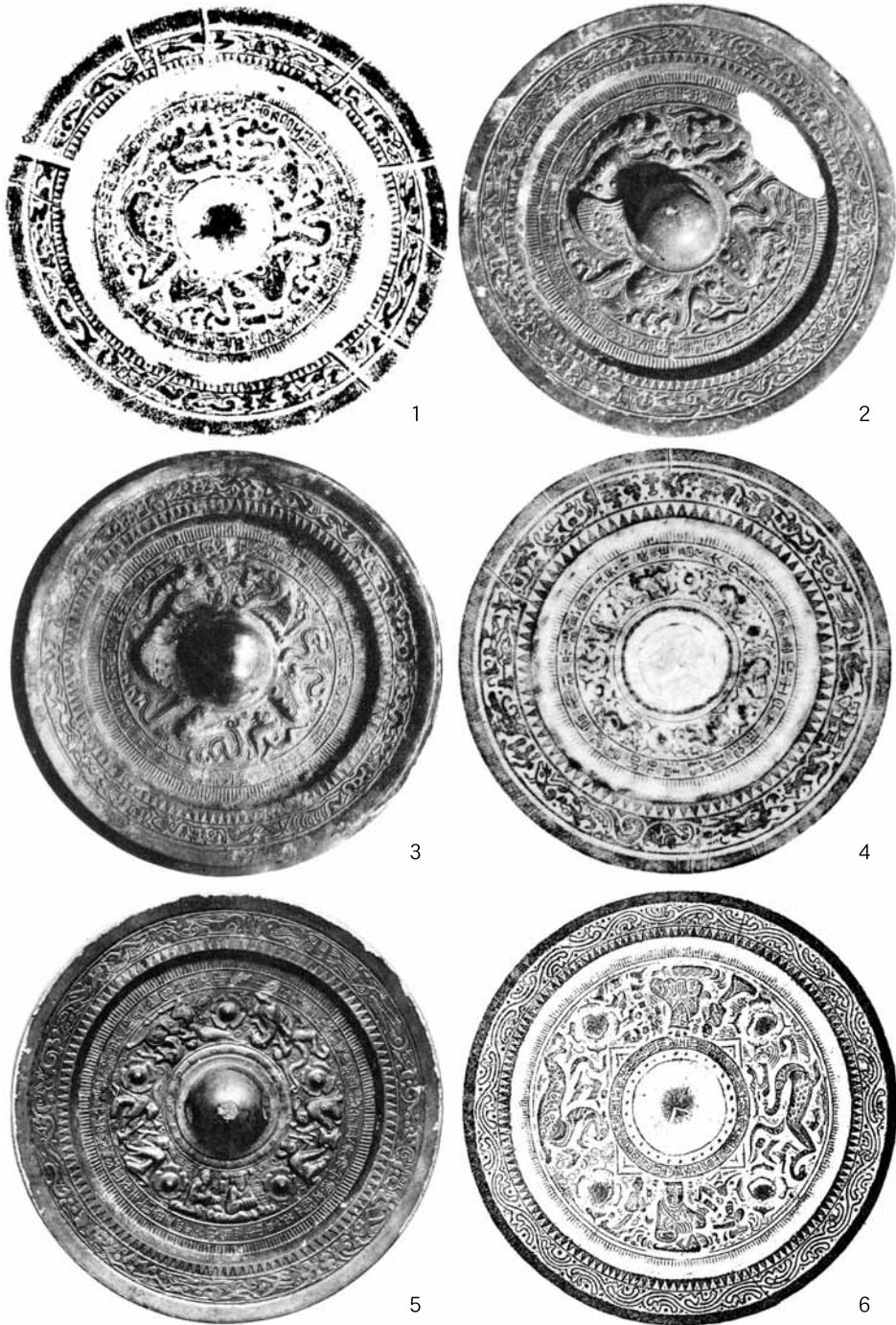


圖2 「杜氏」と「胡氏」の鏡（1 瀋陽市文物考古研究所 2006, 2 浙江 92, 3 巖窟 2 下 61, 4 周世榮 1986 : 圖 80, 5 紹興 50, 6 程紅 1998）

圖像紋様をみても同じことがいえる。圖2-1鏡と圖2-2鏡の主紋は胴部を鈕の下に隠した一對の龍が口を開けて對峙し、先の丸くなった角を、左の龍は後ろに、右の龍は前に伸ばしている。圖2-1鏡の銘文528ではこれを「辟邪天祿」とし、圖2-2鏡の銘文529では「辟邪配天祿」とする。兩鏡ともこの一對の龍は「辟邪」「天祿」と呼ばれたのである〔林巳奈夫1978〕。「辟邪」の本義は文字どおり「邪を辟く」で、「天祿」は『尙書』大禹謨に「天祿永終」、漢鏡4期の銘文426・427〔「中國古鏡の研究」班2009〕に「長保二親得天力(祿)」とあるように、天から授かった幸福を意味する。しかし、『漢書』西域傳の「烏弋の地は……桃拔・師子・犀牛有り」の顏師古注に「孟康曰く、桃拔 一の名は符拔。鹿に似て長尾、一角の者を或るひとは天祿と爲し、兩角の者を或るひとは辟邪と爲す。」とあり、西域に由來する「桃拔(符拔)」という有角の獸を「天祿」や「辟邪」と命名する説があった。もっとも『後漢書』西域傳に「(安息國は)章帝の章和元年(87)に使いを遣りて師子・符拔を獻ず。符拔の形は麟に似て角無し。」とあり、無角の獸を「桃拔(符拔)」とする説もあったが、林梅村〔川上ほか譯2005〕が指摘するように「天祿」は西域の「扶拔(桃拔)」を原形とする「天鹿」であり、章帝代に班超が西域を開拓することによって知られるようになった珍獸であろう。「天祿」が一角の龍形にあらわされたことは、1世紀後半の山東省臨淄金嶺鎮1號墓出土の葉形牌飾〔山東省文物考古研究所1999：圖18〕に「天祿」の題記がある龍形によって裏づけられる。「杜氏」鏡の採り入れた「辟邪・天祿」とは、そのような西域に由來する「奇獸」であったのである。

鈕をはさんで反對側には、右側の龍の股間に王趁意〔2002〕の注意する男根があらわされ、その下では兩足を前に伸ばした羽人が長い縦笛を吹いている。この羽人は圖4-3「呂氏」盤龍鏡の銘文537では仙人の赤松子とする。

外區にめぐらされた獸紋にも「珍奇鏡」をうたう「杜氏」鏡の新機軸があらわれている。本鏡の銘文529に「奇守(獸)竝來出」「三鳥」とあるのがそれで、「三鳥」以下が缺損しているのは残念だが、内區の「辟邪・天祿」にともない、外區には太陽を象徴する三足鳥をはじめとする「奇獸」が出現している。圖2-2鏡をみると、時計盤で8時の位置に顧首形の三足鳥があり、そこから時計回りに、兩角をもつ牛、象、羽人、人頭獸身の怪物、雙魚などが雲氣のあいだにあらわされている。圖2-1鏡の銘文528にも「奇守(獸)竝有。萬里□間、□□□有。」とあるから、拓本ではみえにくい、同じように外區には各種の「奇獸」が表現されていたのであろう。

浙江省紹興市漓渚出土の「杜氏」盤龍鏡(浙江修訂：彩版54)も、本鏡とほぼ同じ内外區の圖像紋様で、銘文は雙龍形の主紋を「辟邪天祿居中央」とあらわし、その銘文531は同じように「名工佳造」と宣傳する。しかし、銘文の形は整った七言句で、第1句の下3字を「善毋傷」とするのは、「尙方」細線式獸帶鏡の銘文504や「呂氏」浮彫式獸帶鏡の銘文

538にある。また、「杜氏」盤龍鏡〔王趁意2002：圖34〕は、主紋が本鏡と同じ圖像表現で、その銘文533に「辟邪天祿居中央」とあらわすが、外区は連続する流雲状の唐草紋となり、作鏡者の「杜氏所作」を第3句においた風変わりな七言句である。このように「杜氏」は銘文を少しづつかえながら、短期間のうちに「辟邪・天祿」を主紋とする盤龍鏡をつぎつぎと連作していったのである。

いままた「杜氏」鏡よりも圖2-2「遺杜氏」鏡に圖像と銘文の近い例として「胡氏」盤龍鏡がある。そのうち銘文534・535は「胡氏作」を銘文の末尾にいており、そのやや控えめな態度は「尙方」の看板の下で「名工杜氏」をかかげた銘文528の鏡と通じている。圖2-3は銘文534の「胡氏」鏡（巖窟2下61）で、内外区の圖像紋様はほとんど同じだが、外区の「奇獸」の配列が本鏡と異なり、時計盤で4-5時の位置に九尾狐が加えられている。四言句を主とする銘文は、第1句の「原夫始萌兮」こそ圖2-2「遺杜氏」鏡の銘文529に類似句はないものの、「五解英華畢。分而無極兮」「上有奇守（獸），出中三鳥」「各得所欲」「吏人服之」など特殊な語句が類似している。このため、「杜氏」が「尙方」から獨立するころ、「胡氏」は「杜氏」と緊密な関係にあったと考えられる。

盤龍鏡に新機軸をうちだした「杜氏」は、同時に新しい獸帶鏡を創作した。圖2-5「杜氏」浮彫式獸帶鏡（紹興50）の銘文530は、圖2-2「遺杜氏」盤龍鏡の銘文529を少し改変したものである。まず「杜氏」の出自した「遺」を省略し、第2句の難解な「世之眇徹」を「世之未有」と簡明にしているものの、例の少ない「涑五解之英華畢。畢而無極兮」はそのまま用いた。民間の購買者を想定しためずらしい「白衣服之金財足」の句は「胡氏」盤龍鏡の銘文535にもあり、「杜氏」と「胡氏」との近い関係を示している。

内区の主紋は四葉紋乳によって5區畫に分けられ、その1つに玉勝をつけて正座する西王母とその左に跪いて奉仕する玉女の圖像があり、それぞれ「西王母」と「玉女」の傍題がある。銘文の「上西王母與玉女」はその圖像を記したものにほかならない。そのほかの區畫には、時計回りに、仙藥を搗く一對の羽人、馬に乗る羽人、虎に乗る羽人、仙藥を搗く一對の兔を配置している。それまでの四神の宇宙觀とは異なり、これは西王母を中心とする仙界をあらわした新しい獸帶鏡の創出である。外区の圖像もまた「奇獸」をあらわした圖2-2「遺杜氏」盤龍鏡と配列をふくめて同じである。

圖2-2盤龍鏡と圖2-5獸帶鏡とは、主紋のちがいがあがるものの、銘文と外区の圖像が近似することから、兩鏡はほぼ同時期に「杜氏」がつくった一連の作品であろう。

この「杜氏」浮彫式獸帶鏡にわずかに先行するのが、湖南省耒陽市野・營1號墓の圖2-4「杜氏」鏡〔周世榮1986：圖80〕である（湖南76の長沙市賓嶺1號墓出土鏡と同一）。その銘文532は、「田氏」・「陳氏」浮彫式獸帶鏡の銘文508・509と同じ樋口分類の銘文MとLを折衷した形で、江南の丹陽に産する善銅を用いて鑄造したことをいう。内区の主紋は圖

2-5「杜氏」鏡と同じように四葉紋乳で分けるが、四神をふくむ6區畫からなり、1區畫多い。外區の獸紋は圖2-5「杜氏」鏡と類似するが、人頭獸身の怪物が脱落し、かわって兩角の牛に鉞を振りかざして闘う怪人、九尾狐、龜などが配されている。

いっぽう、圖2-5「杜氏」浮彫式獸帶鏡に後出し、漢鏡6期に下るのが、合肥市安徽省水電倉庫工地3號墓から出土した圖2-6「杜氏」畫像鏡〔程紅1998：圖3〕である。鈕座の方格に重なって圓圈の銘帯があり、七言句を主とする銘文は、

杜氏作鏡清且明。名工所造成文章。服此鏡富壽昌。十男五女樂未央。居毋事如侯王。とある。「清且明」「成文章」「樂未央」などの句に圖2-4「杜氏」獸帶鏡の名残りをとどめ、正しく金偏につくる「鏡」字や「名工所造」の句は圖2-1・2「杜氏」盤龍鏡や圖2-5「杜氏」獸帶鏡と同じ系統にあることをものがたる。

上述の「杜氏」鏡はすべて外區が獸紋であるから、本鏡の流雲紋は圖5-1の章和年間(87-88)「淮南龍氏」盤龍鏡(六安135)などほかの淮派から借用したものであろう。圖2-5「杜氏」獸帶鏡では西王母が單獨であらわされたが、本鏡では、方格と四葉紋乳で區畫された4畫面に西王母と東王公が對になり、羽人の乗る龍と虎とが對になるように配置されている。兩性を具有して單獨で存在していた西王母が分裂し、女性神としての西王母と男性神としての東王公によって陰陽が調えられ、青龍と白虎によって四方が守られるという二神二獸鏡の宇宙觀があらわされるようになったのである〔岡村1988〕。四神に由來する青龍と白虎の圖像が復活したことは、西域の「奇獸」をいち早く採り入れた圖2-1・2「杜氏」鏡の作鏡姿勢とは背反しているものの、本鏡には圖2-5「杜氏」獸帶鏡と同じ「西王母」・「玉女」という傍題に「東王公」の傍題を加え、玉勝をつけて正座する西王母や羽人の騎乗する白虎の圖像表現にその繼承關係があらわれているのも確かである。兩鏡のあいだに一定時間の経過があったとしても、それは「名工杜氏」が新しい圖像を採りいれて連作した2種の作品と考えてもおかしくないだろう。

ただし、漢鏡5期の淮派には、これら「遺杜氏」とは出自を異にする「杜氏」がいた。五島美術館藏の圖3-1「高河杜氏」浮彫式獸帶鏡は、主紋を四葉紋乳で6區畫に分けて異形の獸を配置し、外區の獸紋も上掲の「杜氏」鏡とは異なっている。その銘文は、

高河杜氏作竟宜侯王。家當大富樂未央。子孫備具居中。長保二親世昌。

とあり、冒頭の「高河」は漢代の郡縣名にはみあたらないが、『漢書』地理志上の「涿郡高陽」の注に「應劭曰、在高河之陽。」とあって、河川の名としてみえる。それはいまの河北省高陽縣で、その比定が誤っていたとしても「遺杜氏」とは出自が異なることは確かであろう。また、湖南省出土の圖3-2「杜氏」盤龍鏡〔周世榮1986：圖83〕は、

杜氏作竟宜侯王。家當大富樂未央。子孫備具居中央。長保□□□□昌。大吉利。

という類似の銘文をもち、「高河杜氏」の作と考えられる。その主紋は龍虎が對峙する形

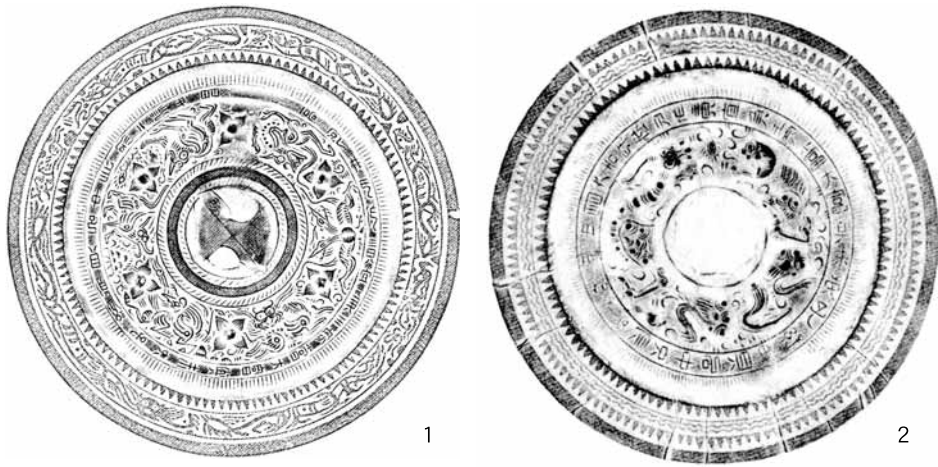


圖3 「高河杜氏」の鏡（1 岡村拓本，2 周世榮 1986：圖83）

で、外区が鋸齒紋となり、圖2-2「遺杜氏」盤龍鏡とは異なっている。しかも、これらの銘文は、作鏡者の部分をのぞけば廣東省韶關市郊8號墓の「張氏」浮彫式獸帶鏡〔廣東省博物館1961〕の銘文514とほぼ同じであり、圖3-1「高河杜氏」鏡の外区の獸紋、丸い目を見開いた主紋の獸表現、三角形に尖った四葉紋乳なども、「張氏」鏡に類似している。したがって、「杜氏」を名のる鏡のいくつかは「遺杜氏」鏡とは別の系統であり、「杜氏」とあるだけで作品の系統を判断することは厳につつまなければならぬ。

3. 「呂氏」と吳派の影響

漢鏡5期後半に「尙方」から自立した「杜氏」の仲間に「呂氏」がある。その初期の作品が湖南省常德地區徵集の圖4-1浮彫式獸帶鏡〔熊建華2001〕で、鈕座の盤龍紋は圖2-1～3の「杜氏」・「胡氏」盤龍鏡と同じ雙龍形の「辟邪・天祿」、足元に長い縦笛を吹く羽人がある。その周圍に「呂氏作鏡善無傷」ではじまる銘文538が反時計回りにめぐる。それは樋口分類の銘文Lを改變した形で、めずらしい語句は少ないが、「善無傷」は「杜氏」盤龍鏡の銘文531に類似句があり、「鏡」字を正しく金偏につくるのも「杜氏」鏡と同じである。内区主紋は四葉紋乳で7區畫に分け、銘文に「左龍有虎辟不羊。朱爵玄武順陰陽」とあるように四神を配置しているほか、ソフトクリーム形の芝草を手にした羽人や各種の樂器を演奏する羽人の圖像がある。樂器を演奏する圖像は、同時期の「尙方」浮彫式獸帶鏡（六安099）の銘文502では「八禽九守（獸）更爲倡」と記され、本鏡の「呂氏」が「尙方」と関係していたことがうかがえる。また、外区にめぐらされた獸紋は、前掲の「杜氏」獸

帯鏡と類似した表現であるが、兩角牛の前には鉞を振りかざす怪人、後ろには戟で攻撃する怪人があり、九尾狐の後ろにあらわされている帆船はめずらしい。この「呂氏」鏡は、四神をあらわした主紋と銘文には新味がないが、鈕座の盤龍紋、四神以外の主紋、外區の獸紋に「杜氏」鏡にみたような進取の氣概が感じられる。

つづいて「呂氏」が製作したのが、五島美術館蔵の圖4-2浮彫式獸帶鏡である。鈕座はソフトクリーム形の芝草と「宜」「子」「孫」の銘文とをいれた乳帶紋で、その周りに銘文539を反時計回りにめぐらせている。起句の前にいれた線表現の鳥紋や「服鏡者奴卑千人」という語句はめずらしい。また、「鏡」字は正しく金偏につくっている。四葉紋乳で6區畫に分けた主紋は、四神から玄武が脱落しているが、ソフトクリーム形の芝草を各所に配したところは圖4-1「呂氏」鏡を繼承している。しかし、外區紋様は同時期には例の少ないS字唐草紋である。

同じころに製作されたのが、北朝鮮ピョンヤン市出土と傳える圖4-3「呂氏」盤龍鏡〔鈴木1971：圖版11〕である。圖4-1「呂氏」獸帶鏡の盤龍座や圖2-1～3の「杜氏」・「胡氏」盤龍鏡と同じ「辟邪・天祿」の主紋をもつが、細部には鏡工のちがいがあらわれ、本鏡にはその股間の男根がなく、縦笛を吹く羽人の表現が少し異なっている。その銘文537も、正しく金偏につくる「鏡」字のほか、「長吏服之曾官秩」「白衣服之」は圖2-2「遺杜氏」盤龍鏡の銘文529や「胡氏」盤龍鏡の銘文535に類似句がある。また、末句の「上有仙師赤涌（松）子」は、「辟邪・天祿」の足元で縦笛を吹く羽人が赤松子であったことを明記し、それが「辟邪・天祿」には缺かせない眷屬であったことがわかる。しかし、起句の前に鳥紋をいれたのは圖4-1「呂氏」鏡と本鏡だけで、本鏡ではそれが浮彫表現になっているほか、銘文を篆書體ふうにしているのは、同時期にはほかに例をみない。このように「呂氏」は「長吏」や「白衣」など官民の購買者に向けて、仲間の「杜氏」や「胡氏」と競いあうように個性的な作品をつぎつぎと發表していたのである。

漢鏡6期になると、「呂氏」は畫像鏡も製作した。初期の作品に圖4-4「呂氏」畫像鏡（故宮52）があり、圖2-6「杜氏」畫像鏡と同じように龍・虎と東王公・西王母の圖像を主紋とする。その表現は「杜氏」鏡といささか異なり、台座に坐った神像はやや細身で、袂や裾の襷が重なりあっている。顧首形の虎は、口を開け、大きな目をいからせている。龍の前後には羽人がある。銘文はほかに例のない獨特の語句を用い、

呂氏作鏡流信德。刻畫□□奇□□。□□□留除治孰。青龍白虎相交錯。東公西母山獨藥。朱鳥玄武般旁則。昌女侍（以下不明）

と讀める。主紋については「青龍白虎相交錯。東公西母山獨藥」とあり、「青龍・白虎」と「東（王）公・西（王）母」をあらわしたことを明記している。鈕座には「杜氏」畫像鏡にみるような連珠紋をめぐらせるが、乳は四葉紋ではなく連珠紋となる。本鏡の外區は、内側

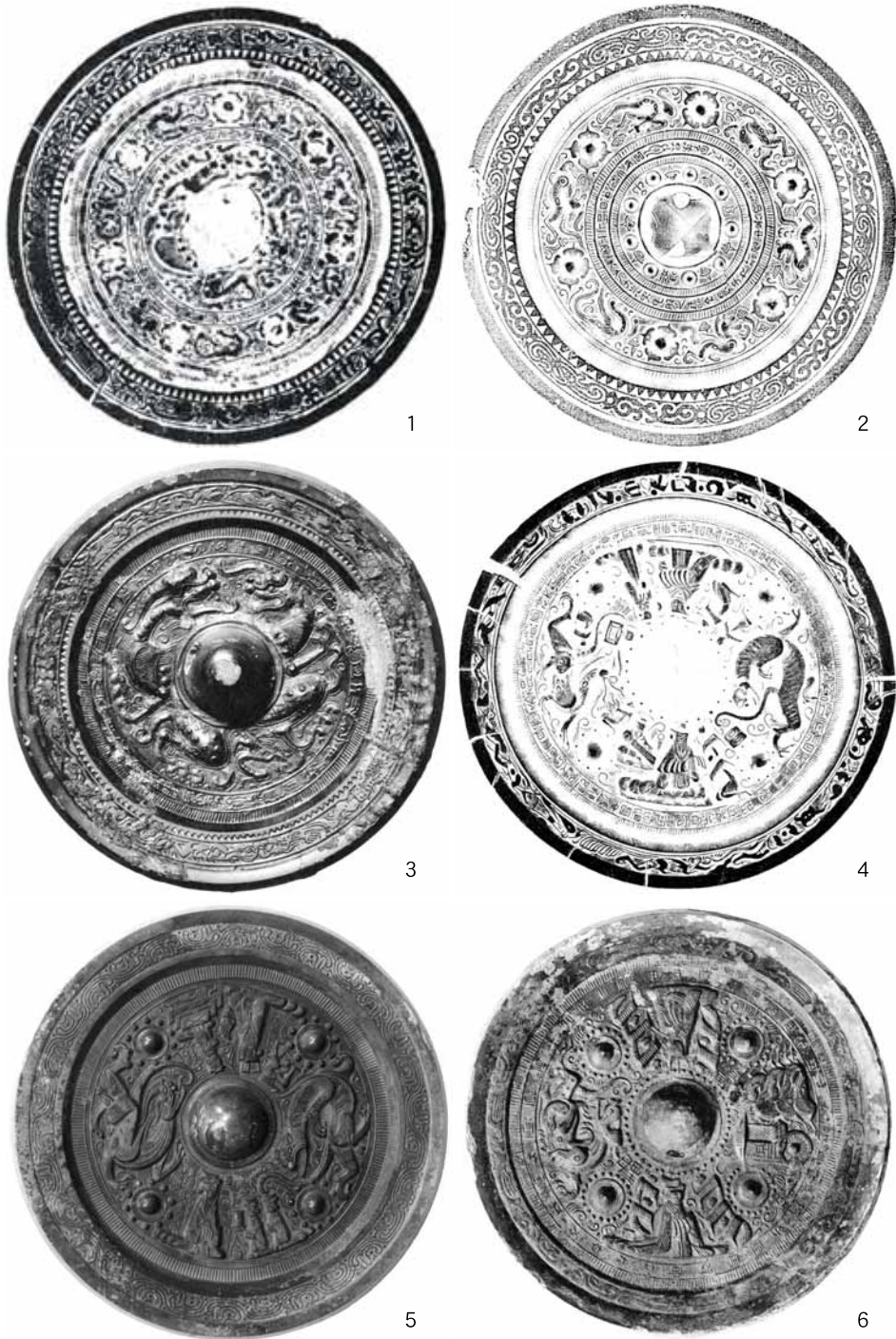


圖4 「呂氏」鏡 (1 熊建華 2001, 2 岡村拓本, 3 鈴木 1971: 圖版 11, 4 故宮 52, 5 岡村寫真, 6 紹興 19)

の鋸齒紋を省略しているが、三足鳥・九尾狐・兩角の牛・羽人・人頭獸身の怪物・象などの獸紋をめぐらせ、「呂氏」の傳統を繼承している。

この「呂氏」畫像鏡と「杜氏」畫像鏡は、圖4-5「建初八年吳朱師作」鏡（浦上129）など吳派の創出した畫像鏡の影響を受けたものであろう。紀年銘をもつ畫像鏡はこれまで未発見であったため、兩性を具有した西王母が陰陽二神に分裂した畫像鏡の出現を100年ごろと推定し、それを漢鏡6期のはじまりとしていたのであるが〔岡村1988・1993〕、その「建初八年（83）」という紀年銘を認めるならば、東王公は漢鏡5期のうちに出現したと考へざるをえない。すなわち、「尙方」から「杜氏」や「呂氏」らが自立して獨特の浮彫式獸帶鏡や盤龍鏡をつくったのと同じころ、會稽郡吳縣（いまの江蘇省蘇州市）に出自する「朱師」は畫像鏡を創作したのである。その「朱師」鏡は上野〔2001〕分類の廣畫面Ia式で、四方を守る青龍・白虎と陰陽を調える東王公・西王母をあらわし、「東王公」・「玉女侍」・「西王母」の傍題と西王母の左に「建初八年吳朱師作」銘を記している。主紋を區畫する乳は連珠紋、外區は流雲紋で、鈕座の紋様帶、内區外周の銘帶、外區内側の鋸齒紋はない。そのとき淮派の「杜氏」や「呂氏」は新たに開拓された西域由來の「奇獸」を採り入れた鏡をつくっていたが、吳派の創作した畫像鏡を見習ってつくったのが圖2-6「杜氏」畫像鏡と圖4-4「呂氏」畫像鏡であったのだろう。「呂氏」は外區的獸紋や銘文こそ獨自の傳統を守っているものの、「朱師」畫像鏡の圖像構成や連珠紋乳はそのまま採り入れた。顎髭をたくわえた東王公や顧首形の白虎の表現もかなり近似している。

漢鏡5期にさかのぼる吳派の作品には、ほかに「柏師」浮彫式獸帶鏡（浙江24）や「吳向里柏師」盤龍鏡（浙江97）がある。「吳向里」は吳縣城内の地名で、上野祥史の分類によれば、後者の盤龍鏡は東方青蓋系〔上野2003〕、「吳朱師」畫像鏡は錢塘江流域の尙方系となるが〔上野2001〕、いずれも銘文どおり吳縣で製作されたものだろう。吳縣と會稽山陰（いまの浙江省紹興市）とは「吳會」と略稱される江南の二大都市であり、吳縣は129年に會稽郡を分割して設置された吳郡の郡治となった。「吳朱師」畫像鏡のように、吳派では「氏」のかわりに「師」を用いたのも特徴のひとつである。

千鏡堂153の「呂師」盤龍鏡は、樋口分類の銘文Nをもち、主紋は對峙する龍と虎の反對側にも有角の龍を配置している。圖4-3「呂氏」盤龍鏡とは、銘文のほか、圖像の配置と表現が異なるため、淮派の「呂氏」とは別の鏡工で、「師」を用いていることからみると、吳縣の鏡工であった可能性があろう。

また、圖4-6「呂氏」畫像鏡（紹興19）は、上野〔2001〕分類の廣畫面II式で、漢鏡7期に下る吳郡系と考えられている。しかし、鈕座と乳にめぐらした細かい連珠紋や外區的畫一化した獸紋は、いずれも淮派の圖4-4「呂氏」鏡を繼承している。そのいっぽうで白虎のかわりに車馬の圖像がはいり、「西王母」と「車馬」の傍題が加えられている。東王公と

西王母にはそれぞれ右に3人、左に2人の仙人が侍し、主神・脇侍とも圖4-4「呂氏」鏡より表現がいちじるしく形骸化している。その銘文は、

呂氏乍竟世少有。東王公西王母。仙人子喬赤誦子。車馬辟邪在左右。爲吏高升賈萬倍。とあり、主紋は「東王公・西王母」に「仙人の(王)子喬・赤誦(松)子」がともない、「車馬」と對になる龍形は「辟邪(邪)」であることが知られる。おそらく圖4-4「呂氏」鏡の「青龍・白虎」が「車馬・辟邪」に置き換わることによって、四方を守る「青龍・白虎」のはたらきは「辟邪」が擔い、「車馬」は陰陽の循環を助ける役割をもつのであろう。起句の「世少有」と末句の「爲吏高升賈萬倍」は、圖5-4「石氏」盤龍鏡の銘文521や圖5-2「尙方」盤龍鏡の銘文522などにあり、「爲吏高升」は「呂氏」浮彫式獸帶鏡の銘文540に用いられためずらしい語句である。このように鈕座・乳・外区の紋様や銘文には淮派の名残りが認められるのであるが、漢鏡5期の「呂氏」がこだわりつづけた「鏡」字は「竟」となり、圖像表現も「呂氏」の作品とは思えないほど變容している。筆者は本鏡を漢鏡6期に位置づけるが、漢鏡5期に新作を相ついで発表していた「呂氏」の傳統は世代交代によってすでに失われていると考えている。

4. 「龍氏」鏡と龍虎形の盤龍鏡

安徽省壽州市板橋鎮黃安村から出土した圖5-1「淮南龍氏」盤龍鏡(六安135)は、紀年銘Cの冒頭に「隆帝章和時」とある。「章和」は後漢章帝の年號で、87～88年にあたる。前漢の淮南國は壽春(いまの安徽省壽州市)に都があったが、前112年に淮南王安の謀反によって國が除かれ、九江郡に編入された。それ以後、行政区畫としての「淮南」は實在しないが、地域名としては用いられつづけ、王莽の滅んだときには李憲が淮南王を自稱し、三國魏では淮南郡が設置されている。このため、本鏡をつくった「淮南龍氏」は、その出土地であり、もと淮南國のあった壽州市周辺に出自するのだろう。

本鏡の内区には、鏡に向かって左に龍、右に虎が對峙し、外区に流雲紋をめぐらせる。本鏡の銘文に「刻畫云氣龍虎虫」とあり、外区の紋様は「云(雲)氣」、内区の圖像は「龍虎虫(蟲)」と呼ばれていたことがわかる。「虫」は鳥獸の總稱で、「龍虎虫」は「龍や虎という動物」というほどの意味である。龍は角の基部に3つの羽根狀隆起をもつのが特徴で、「杜氏」・「呂氏」盤龍鏡などの「辟邪」に類似し、鏡工の近い関係がうかがえる。虎の頭はやや斜めを向き、口を開け、丸い目を見開いている。鈕の反対側には臼で仙藥を搗く羽人があり、銘文の「上有山(仙)人壽無窮」をあらわしたものであろう。

この「淮南龍氏」鏡と龍虎表現が近似する盤龍鏡を圖5に示した。圖像表現と配置にもとづく上野祥史〔2003〕の分類ではすべて型式1Bで、龍氏系とされている。ただし、銘文

はそれぞれに特色があり、それを讀み解いて淮派の作鏡動向を明らかにしたい。

圖5-2は廣西壯族自治區貴港市深釘嶺32號墓の「尙方」鏡〔廣西壯族自治區文物工作隊ほか2006〕である。その銘文522には「倉（蒼）龍在左，白虎居右」とあり、主紋は四神に由來する「蒼龍・白虎」であったことがわかる。「淮南龍氏」鏡とは、龍と虎のあいだに芝草紋を加え、鈕の反對側の羽人を省略し、外區に唐草狀の尾をもつ5單位の獸紋をいれる、といったちがいがあつたものの、龍虎表現が共通することからみれば、「尙方」にとどまつた工人とそこから分立した「龍氏」との近い關係性は明らかである。

圖5-3は北朝鮮ピョンヤン市出土と傳える「李氏」鏡（樂浪郡：圖版1307）である。内區主紋は、圖5-2「尙方」鏡と同じように、龍と虎のあいだに芝草紋をいれるが、鈕の反對側には踊る羽人をあらわしている。外區は「杜氏」・「呂氏」鏡と同じような獸紋で、九尾狐、三足鳥、兩角をもつ牛、魚などが反時計回りにめぐらされている。その銘文519には「左龍右虎扶兩旁。朱爵玄武從陰陽」とあり、主紋の龍虎が「左龍右虎」とされているが、「朱爵玄武」の圖像は外區にもあらわされていない。これは「尙方」獸帶鏡の銘文501などの語句をそのまま踏襲したからであろう。ただし、「單于來臣至漢疆」は、建武二十四年（48）に南匈奴の呼韓邪單于が五原塞にいたつて「來臣」した事件（『後漢書』南匈奴傳）を指しているもので、鏡銘ではほかに例がない。この「李氏」鏡は、樋口分類の銘文Lの語句を一部に用いながら、獨特の語句を取り入れたのである。

圖5-4は浙江省上虞縣出土の「石氏」鏡（浙江修訂：彩版56）である。その銘文521は圖5-2「尙方」鏡の銘文522と「世少有」「倉龍在左，白虎居右」「爲吏高升賈萬倍」「辟去不詳利孫子」など共通する語句が多く、外區は「尙方」・「青蓋」鏡に多い鋸齒紋であることから、「石氏」は「尙方」と深い關係にあつたことがわかる。龍虎の股間には「杜氏」・「呂氏」盤龍鏡のように長い縦笛を吹く羽人が配されている。ただし、圖4-3「呂氏」鏡の銘文537では「仙師赤涌（松）子」とされたが、この銘文では「仙人（王）子喬（喬），以（似）象（像）於後」とあり、仙人の王子喬としている。仙人の赤松子と王子喬とは、しばしば並稱され、同じような圖像で表現されたのである。

浙江省紹興縣から出土した「石氏」盤龍鏡〔紹興縣文物保護管理所2002：卷頭圖版〕は、本鏡と同じ工人の作品であるが、外區的鋸齒紋が二重に省略され、内區からは羽人が脱落し、主紋の龍虎表現も退化している。岡村〔1993〕分類の盤龍鏡IB式である。

圖5-5は北朝鮮ピョンヤン市梧野里出土と傳える「成平」鏡（樂浪郡：圖194）である。内區の一部を缺損するが、龍虎の股間に「宜子孫」銘をいれ、外區が鋸齒紋となるほかは、圖5-2「尙方」鏡とほとんど同じ圖像紋様で、岡村分類の盤龍鏡IA式に屬している。その銘文520も圖5-2「尙方」鏡の銘文522と「倉龍在左，白虎居右」「爲吏高什賈萬倍」「長保二親樂無已」などの語句が共通する。注目すべきは、その第1句である。報告は第3

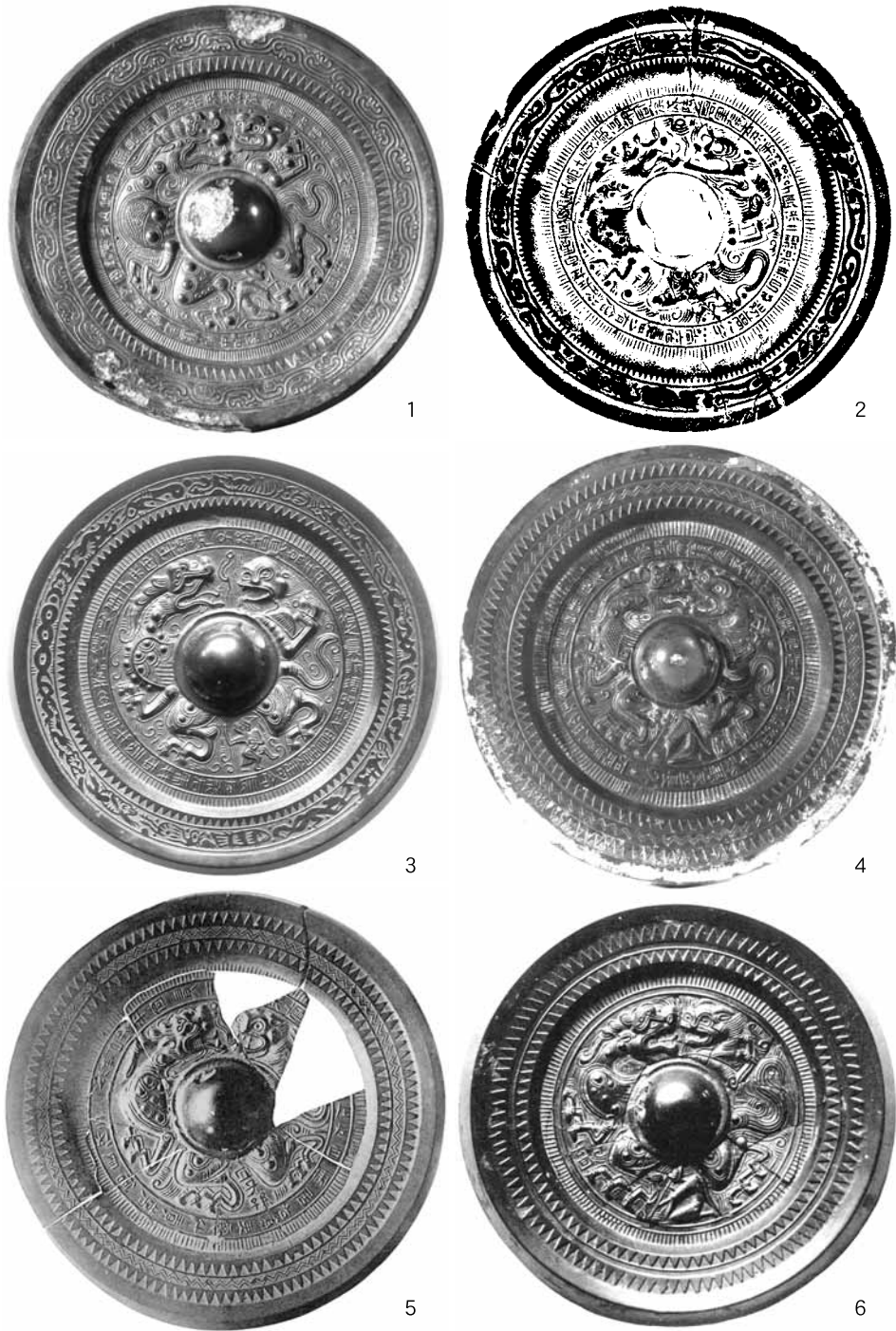


圖5 龍虎形の盤龍鏡 (1 六安 135, 2 廣西壯族自治區文物工作隊ほか 2006, 3 樂浪郡: 圖版 1307, 4 浙江修訂: 彩版 56, 5 樂浪郡: 圖 194, 6 樂浪郡: 圖版 1308)

句までを「成平造竟眞□□。□□□□□在左」と七言句に讀んだが、銘文 541 などを参考にすれば「成平倚竟尙，世間未嘗有。倉龍在左」と復元できる。「倚」は「奇」の假借で、銘文 541 の「朱氏作珍奇鏡兮，世間未嘗有」と同じように、世にもめずらしい鏡であることを宣傳したものである。類似の龍虎表現をもつ圖 5-2 「尙方」鏡の銘文 522 や圖 5-4 「石氏」鏡の銘文 521 にいう「世少有」は、これとほぼ同じ意味である。冒頭の「成平」は『續漢書』郡國志二にみる河間國の屬縣で、いまの河北省交河縣に故治がある。このため、第 1 句は「成平の奇鏡なり」と讀んで、「成平」で製作されたと解釋できる。鏡工の名は記されていないが、圖像や銘文からみて「尙方」から分かれた「淮南龍氏」・「石氏」・「李氏」に近い関係にあったことは確かであり、淮河流域から「成平」に移動して本鏡を製作したと考えられる。漢鏡 5 期後半に「尙方」から鏡工たちが自立していくなかで、「成平」鏡は新天地で生産されたものであろう。

圖 5-6 は傳ピョンヤン市出土の盤龍鏡（樂浪郡：圖版 1308）である。内區外周の銘帯が省略され、外區が二重の鋸齒紋に省略された岡村分類の盤龍鏡 I B 式である。圖 5-5 「成平」鏡と同じような龍虎表現で、左龍の脚間に「宜子」の 2 字をいれるが、龍虎のあいだの芝草紋を省略し、鈕の反対側に長い縦笛を吹く羽人をいれた點は圖 5-4 「石氏」鏡に近い。圖 5-5 「成平」鏡と同じ地域から出土し、圖像紋様が類似することから、樂浪郡の對岸にある「成平」でつくられた可能性があろう。このことを認めるならば、「成平」での作鏡は、ごく短期間の出張生産ではなく、岡村分類の盤龍鏡 I A 式から I B 式にいたる、およそ 1 世代の期間におよんだと考えられる。

議論を「龍氏」に戻そう。「龍氏」盤龍鏡のほとんどは、外區が鋸齒紋で、内區主紋は龍虎の反対側にも有角の龍を配した上野〔2003〕分類の配置 B 2 である。主紋の表現は圖 5 にとりあげた龍虎形に類似し、「淮南龍氏」と同じ工房の製品であったのだろう。しかし、その銘文 543 は樋口分類の銘文 N に屬し、後漢王朝が西羌に手を焼くようになった時代を反映する「胡羌除滅天下復」の句をのぞけば、目新しいところはない。

これにたいして圖 6-1 「龍氏」浮彫式獸帶鏡（富岡：圖版 24/ 古鏡：中 20）は、獨特の圖像と銘文をもった鏡である。その銘文 542 は「刻畫」「壽無窮」などのめずらしい語句が「淮南龍氏」鏡と共通するほか、「淮南龍氏」鏡では「涑治同（銅）。合會銀易（錫）得和中」とあったのを、本鏡では「采取善同（銅）出丹楊（陽）。和以良（銀）易（錫）清且明」としており、語句は異なるものの、兩鏡ともすぐれた銅に銀錫を調合した合金を用いて鑄造したことをうたっている。「淮南」と「丹陽」とは直線距離で 250 km ほど、後漢代にはともに揚州刺史部に屬し、いまは安徽省の管内にある。また、本銘は圖像について「刻畫奇守（獸）」とし、具體名として「距虛」「辟邪（邪）」「師（獅）子」「天祿」「辟邪」「交龍」をあげる。さきに論じたように「辟邪」と「天祿」は西域に由來する「奇獸」であり、本銘で

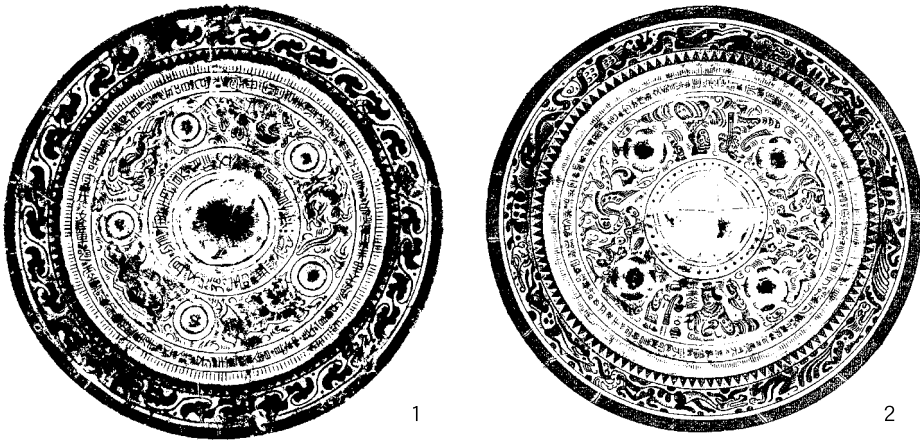


圖6 「龍氏」鏡（1 古鏡：中20，2 開明堂47）

はさらに「距虚」「獅子」「交龍」が加えられている。ライオンの圖像はまれに漢鏡4期の獸帶鏡などにあらわされているが、「獅子」の銘文はこれが初出であり、『後漢書』西域傳に「(安息國は) 章帝の章和元年(87)に使いを遣りて師子・符拔(天祿)を獻ず」という記事と関係があるかもしれない。「距虚」は漢鏡4期の銘文414～417に「角王巨虚」とあり、林巳奈夫〔1978〕は本鏡にあるウサギのような圖像をそれに比定し、蒙古高原に棲息する跳鼠と驢馬がモデルだと考證している。これら西域から新たに傳わった珍獸にたいして、「交龍」だけは古くから中國にある瑞獸で、漢鏡4期の銘文420には「駕交龍兮乘浮雲」とあった。

圖6-2は漢鏡6期に下る「龍氏」畫像鏡(開明堂47)である。銘文は圖6-1「龍氏」獸帶鏡の外圍銘とほぼ同じで、第6・第7句を「師子天祿會聚叢。長宜子孫兮」とし、第3句の「良易」を「銀易」と改めているだけである。しかし、圖像紋様はまったくちがっている。外區の獸紋はいささか愛嬌のある表現だが、「杜氏」・「呂氏」鏡のそれと類似し、銘文の「奇獸」をあらわしたものであろう。蛇の巻きついた魚は漢鏡4期の獸紋にみえる。内區は圖2-6「杜氏」畫像鏡と同じように四葉紋乳で4區畫に分け、上野〔2001〕分類のデフォルメ神獸B式の主紋を配置する。左右に侍従がひかえる東王父(公)と西王母、2頭の獸とそれにまたがる羽人、2羽の鳥とそれに伺候する羽人があり、東王父には「東王父坐」の傍題がある。センチュリー21「張氏」畫像鏡には「東王公坐」「西王母坐」「女倡坐」の傍題があり、外區が流雲紋で馬車と玉女の圖像をもつことは異なるが、連珠紋鈕座、四葉紋乳、頭の大きな神像表現などは本鏡に類似する。

以上のことから、章帝の章和年間(87-88)に圖5-1盤龍鏡をつくった「淮南龍氏」は、

章和元年(西暦479年)に西域から珍獣がもたらされたことをうけて、そうした「奇獸」を圖像と銘文にあらわした圖6-1「龍氏」獸帶鏡をつくったと考えられる。もともと「尙方」に出自する「龍氏」は、盤龍鏡の製作において「石氏」や「李氏」と近い関係にあり、その主紋には伝統的な四神に由来する「蒼龍・白虎(左龍・右虎)」を用いていた。その「龍氏」が四神を主とする瑞獸を放棄して新來の「奇獸」からなる獸帶鏡をつくったのである。先行して「辟邪・天祿」や「奇獸」を採り入れていた「杜氏」や「呂氏」からの影響があったのだろうが、「龍氏」はさらに「距虛」や「獅子」を追加した。その「龍氏」がつぎに試みた作品が、圖6-2 畫像鏡である。圖6-1 獸帶鏡とほぼ同じ銘文をいれながら、「杜氏」や「呂氏」、「張氏」との連携のもと、東王公・西王母の陰陽二神を主とするまったく新しい圖像をそこに採り入れたのである。

5. 「池氏」獸帶鏡の系譜

漢鏡5期の細線式獸帶鏡には、外區が鋸齒紋のものや獸紋や流雲紋などのものがあり、鋸齒紋の獸帶鏡では「尙方」から「青蓋」が分立し、獸紋の獸帶鏡では「杜氏」や「呂氏」らが自立したことは上述のとおりである。圖7の1・2は外區に獸紋をもつ漢鏡5期前半の細線式獸帶鏡ⅣA式で、2面とも連弧紋乳で7區畫に分けた内區に四神をふくむ瑞獸をいれている。圖7-1鏡の獸紋はS字形の雲氣紋を3か所にいれ、そのあいだに三足鳥、九尾狐、羽人、魚などを配している。雲氣や獸の體軀には縞模様や斑紋があり、その手法はのちに「杜氏」や「呂氏」鏡の獸紋に繼承される。これにたいして圖7-2鏡の獸紋は、三足鳥のいる太陽、蟾蜍のいる月、五銖錢紋を四方に配し、そのあいだに九尾狐、羽人、兩角をもつ牛などを影繪ふうにいれている。ここで検討しようとするのは、圖7-2鏡のような獸紋を外區にいれた一群の鏡である。本鏡には「尙方作」ではじまる樋口分類の銘文Lがあり、日月錢紋をいれた獸紋が漢鏡5期前半に「尙方」で用いられていたことがわかる。その「尙方」から自立した鏡工に「池氏」・「張氏」・「陳氏」・「侯氏」などがあり、樋口分類の銘文Lを繼承しつつ、めずらしい語句を挿入しているところに特色がある。たとえば、「陳氏」浮彫式獸帶鏡の銘文509にみる「令人陽遂貴復富」「□□細守各自治」「左有青龍來福祐」、「侯氏」浮彫式獸帶鏡の銘文511にみる「夫妻相保如威央兮」、「張氏」浮彫式獸帶鏡の銘文512にみる「八子九孫居高堂」「爲吏宜官至侯王」などである。ここではそのなかでも獨創的な作品をつくった「池氏」を例に、漢鏡5期の細線式獸帶鏡から漢鏡6期の浮彫式獸帶鏡にいたる系統を追ってみよう。

圖7-3は河南省新野縣沙堰郷出土の「池氏」細線式獸帶鏡〔劉紹明1996〕である。鈕座には1頭の龍が盤踞する。内區は四葉紋乳で7區畫に分け、細線表現の瑞獸と羽人を配置

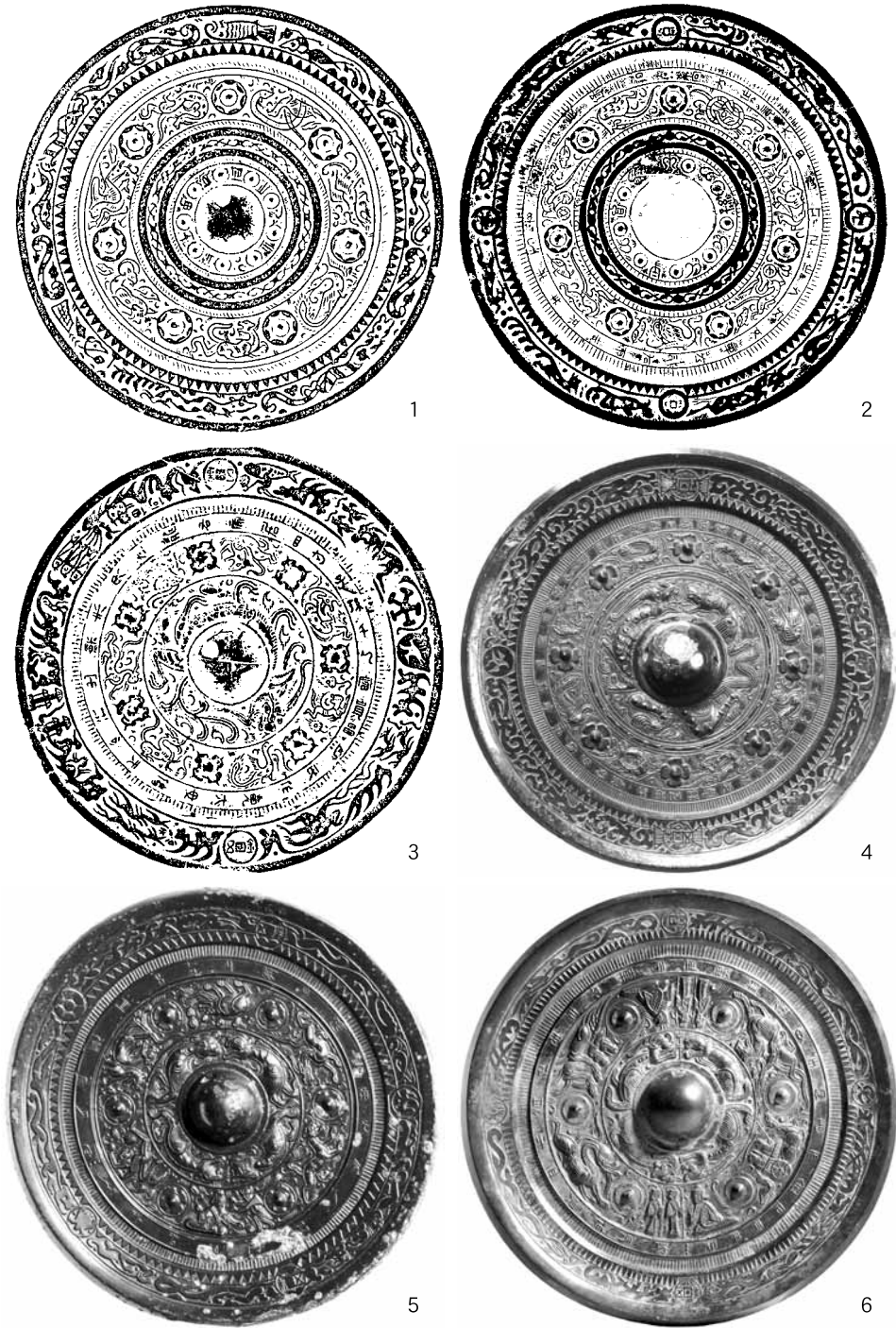


圖 7 獸紋緣獸帶鏡 (1 岡村拓本, 2 激秋館 65, 3 劉紹明 1996, 4・5・6 人文研考古資料)

するが、その主紋について銘文 515 には「左龍右虎居四方」とあるだけで、実際に四神のうち玄武の圖像が脱落している。この特徴からみて、圖 7-2 「尙方」鏡より後出する細線式獸帶鏡 IVB 式に位置づけられる。外區は「天公」と「何(河)伯」の傍題をもつ圖像で、凹紋で蟾蜍をいれた月を起點に反時計回りにみると、雙闕の天門、2頭の龍に引かれて出行する「天公」の雲車、五銖錢紋、雲氣と獸、三足鳥のいる太陽、2羽の鳥が引く雲車、提灯を手にした羽人の乗る魚、五銖錢紋、3匹の魚が引く「何伯」の雲車がある。銘文ではこの一連の圖像を「天公行出」とする。本鏡は「尙方」から自立した「池氏」が早い時期につくった作品であろうが、同じ IVB 式に屬す圖 1-5 「青蓋」鏡は圖像と銘文がすでに形式化していることを考えると、外區圖像の獨創性は高く評價できる。

圖 7-4 は五島美術館蔵の「池氏」浮彫式獸帶鏡(樋口:圖版 50-99)で、銘文 516 をもつ。盤龍座には龍と虎が對峙し、銘文の「倉龍白虎主除道兮」はこの圖像をいうのであろう。龍の角は基部に細線で縞をいれるだけで、虎は頭を斜めに傾けている。同じ龍虎形でも、圖 5 にあげた「龍氏」系の盤龍鏡とは圖像表現が異なっている。龍虎の股間には細線表現の小鳥がある。内區は四葉紋乳で 8 區畫に分けるが、四神のうち玄武が脱落し、瑞獸や羽人を配置する。圖像のいくつかは圖 7-3 「池氏」鏡の細線表現を浮彫表現に變えただけで、その繼承關係は明らかである。外區の日月は圖 7-3 鏡と同形だが、五銖錢は玉勝形の獸勝錢となり、獸紋は唐草狀に形式化している。

河南省洛陽市儲運站 18 號墓出土の「池氏」盤龍鏡(洛陽:彩版 3)は、龍と虎が對峙し、その股間の小鳥が浮彫表現になっているものの、本鏡の盤龍座と圖像の構成と表現が類似する。上野〔2003〕分類による盤龍鏡の型式 3 BL で、東方青蓋系とされている。その銘文は漢鏡 6 期に下の圖 7-6 「池氏」浮彫式獸帶鏡に類似し、

池氏作竟未有。位至三公車生耳。令□□□□□。

とあるが、第 3 句は鏽で讀めない。外區は岡村〔1993〕分類の鋸齒紋 a 2 で、本鏡よりわずかに後出する漢鏡 5 期末の作品であろう。

圖 7-5 は個人蔵の「池氏」浮彫式獸帶鏡で、銘文 517 をもつ。末句の「令人陽遂不知老兮」はめずらしい。盤龍座は正面向きの龍と横向きの虎が對峙する圖像が 2 組ある。龍の頭に角がないため虎のようにみえるが、體軀には龍の鱗があらわされている。内區は圓圈のある四葉紋乳で 6 區畫に分け、龍や虎などの瑞獸と西王母・羽人が配されている。西王母は左手を前に差し出し、その前に羽人が両手を差し出して立つ。左側の區畫には羽人と鳥が逆立ちしている。この 2 人の羽人が銘文に「上有王僑赤甬子」という王子喬・赤松子であろう。ただし、西王母が銘文にあらわれていないのは不思議である。外區は日・月・五銖錢に星をあらわす内向連弧紋を加えた 5 區畫とし、日・月の三足鳥・蟾蜍は陽紋であらわされ、五銖錢紋は獸の體軀の中央にあり、獸の體軀はパンダのような斑紋をもってい

る。圖2-5「杜氏」浮彫式獸帶鏡とは紋様構成や圖像表現が異なるものの、西王母が單獨であらわされている点は共通する。四神の玄武・朱雀によって陰陽を調える宇宙観がくずれ、その役割を両性を具有する西王母が擔うようになったのである。

圖7-6はフィッツウィリアム美術館蔵の「池氏」浮彫式獸帶鏡である。新たに東王公が出現し、西王母とは鈕をはさんで對置されている。鈕座には對峙する龍虎が2組あり、龍に角があることをのぞけば、圖7-5鏡の鈕座をほぼ踏襲している。主紋を6區畫に分けることも同じだが、乳は簡素な圓座になっている。東王公は三山冠をかぶり、東王公と西王母にはそれぞれ戟を手にした2人の侍者が伺候している。その浮彫表現は畫像鏡に類似し、ほかの圖像と差別化している。西王母から反時計回りにほかの圖像をみると、2人の人物が乗る馬車とその後ろに小鳥、虎にまたがる羽人があり、東王公につづいて2體の龍に乗る2人の人物と龍がある。東王公・西王母に羽人の騎乗する虎と龍を配置することは圖2-6「杜氏」畫像鏡と同じで、本鏡ではそれに加えて、馬車や龍に乗る2人の人物がその虎や龍に導かれて東王公や西王母のもとに出行する構成になっている。その銘文は、

池氏作竟世未有。位至三公車生耳。男封侯女王婦。壽而金石西王母。

と出世や長壽を祝頌する吉祥句からなっている。「世未有」は銘文521・522の「世少有」や銘文520・541の「世間未嘗有」の類似句で、「車生耳」は銘文507に「爲吏高官車生耳」とある。「壽而(如)金石西王母」とあるのは、西王母が不老長壽の神格として信仰されたからだが、圖像に登場した東王公は西王母と對になって陰陽を調和する役目だけを擔っていたのであろう。外區は通常の日・月・五銖錢の4區畫に戻り、五銖錢紋と獸とは分離しているが、獸の體軀はパンダのような斑紋をもち、圖7-5鏡の手法を繼承している。

以上のように、細線式獸帶鏡IVB式の段階に「尙方」から獨立した「池氏」は、鈕座に盤龍紋、主紋に四神の一部脱落した瑞獸、外區に日・月・五銖錢で區畫した獸紋をもつ獸帶鏡を連作していった。そのなかで主紋表現が細線から浮彫に變化し、ついで四神の玄武・朱雀にかわって両性を具有する西王母があらわれ、やがて東王公が登場して西王母と陰陽を調える役目を擔うようになったのである。初期の段階では「天公」と「河伯」の「行出」を外區にあらわし、最後の段階では東王公と西王母に馬車と龍とが出行する場面を内區に表現しているのも、宇宙観の變化を暗示するものであろう。漢鏡5期末に西王母が單獨であらわれ、漢鏡6期に西王母の對として東王公が配偶されたことは、同じ淮派の「杜氏」鏡と軌を一にしている。しかし、「杜氏」は「呂氏」や「龍氏」らとともに吳派の影響をうけて獸帶鏡から畫像鏡に轉換したのにならして、「池氏」は畫像鏡の表現を一部に採りいれながらも東王公・西王母を獸帶鏡のなかに組みこんだのである。そこに鏡工それぞれの獨自性があらわれている。

6. 淮派の作鏡動向

漢鏡5期後半に「尙方」から鏡工たちが自立し、それぞれに特色のある獸帶鏡と盤龍鏡の製作を競い、漢鏡6期に畫像鏡を生み出すプロセスは、つぎの4段階に分けられる。

第1段階は、およそ明帝(在位57-75)のころである。もともと「尙方」は宮廷御用品を製作する官營工房の名であったが、品質の低下と形式化とによって、そのブランド力が落ちていった。生産の中心であった方格規矩四神鏡は、方格から方位をあらわす十二支銘がなくなり、四神の一部が脱落していったのである。これに不満をもつ有志の鏡工たちは、方位の規範をもたない獸帶鏡に生産の比重をおき、そこに新しい意匠を採り入れていった。浮彫であらわした鈕座の盤龍紋や影繪ふうの瑞獸をめぐらせた外区の獸紋がそれである。また、徑20cmをこえる大型の獸帶鏡がつくられ、その盤龍座をぬきだして内区の主紋とする盤龍鏡が創作された。このなかで自立したのが「青蓋」を商號とする鏡工たちである。まず「尙方」細線式獸帶鏡の銘末に「青蓋の志」を示し、ついで「青蓋作」を銘文の冒頭にかかげたのである。「青蓋」は盤龍座を採り入れたものの、外区の鋸齒紋、圓座乳、四神を中心とする主紋などは舊來のまま、その後も創造性を發揮できずに「尙方」と同じマンネリズムの道をたどった。これにたいして「池氏」は「青蓋」より少し後れて「尙方」から自立した。「池氏」は、浮彫の盤龍座に加えて、日・月・五銖錢で區畫した外区に「天公行出」の圖像をいれるなど、ほかに例のない斬新な細線式獸帶鏡をつくりだした。これが先蹤となって、つぎの第2段階には「尙方」から腕ききの鏡工が獨立することはもはや抑止できないようになったのである。

製作地は異なるが、永平七年(64)内行花紋鏡に「公孫家作竟」の銘文があるのも、これと一連の動きであろう。また、ピョンヤン市郊外の王盱墓から出土した漆盤には「永平十二年(69)蜀郡西工、夾紵行三丸、宜子孫、盧氏作」の朱書があり、蜀郡工官のなかにも漆工の「盧氏」が頭角をあらわすようになっていた〔榎本ほか1974〕。明帝のころには、各地の官營工房で腕ききの工人が自立の動きをみせはじめていたのである。

第2段階は、およそ章帝(在位75-88)のころで、浮彫式獸帶鏡の創出がひとつの指標となる。元和三年(86)浮彫式獸帶鏡には「尙方造竟、在於民間」という銘文、「杜氏」盤龍鏡の銘文528には「尙方名工、杜氏所造」とあり、「尙方」のブランド力はますます失墜し、まもなく「杜氏」・「胡氏」・「呂氏」や「龍氏」・「石氏」・「李氏」らが相ついで自立した。作鏡者の姓氏のほかに、章和年間(87-88)「淮南龍氏」盤龍鏡や「遺杜氏」盤龍鏡のように鏡工の出自を併記した銘文もある。これらは「珍奇鏡」や「世少有」などめづらしい鏡であることを銘文に宣言し、「長吏」や「白衣」など官民さまざまな購入者を対象に鏡の效能をうたっている。類似の銘文は鏡のほかにもあり、たとえば山東省蒼山縣柞城から出土

した元和四年(87)銅壺〔劉心健ほか1983〕には、

元和四年，江陵黃陽君作，宜子孫及酒食，吏人得之，致二千石，古人得之，致二千萬，
田家得之，千厨萬倉。

という銘文を刻んでいた。酒をいれる禮器であっても「吏人」「古(賈)人」「田家」など不特定のひとを對象に販賣され、結果的に「江陵(いまの湖北省荊州市)」に出自する工人の作品が山東省にまで流通していたのである。章帝のころには、このような奢侈品の生産はもとより、鹽や鐵のような生活必需品ですら中央の統制がむずかしくなっていた。章帝は建初六年(81)に鹽鐵專賣を一時的に復活したものの、「而るに吏に不良多く、^{とかく}動にその便を失ない、以て上の意に違ふ。先帝(章帝)これを恨みとし、故に郡國に遺戒して鹽鐵の禁を罷め、民の煮鑄を^{ゆる}縦し、税を縣官に入ること故事の如くせしむ。」(『後漢書』和帝紀)とあり、鹽鐵專賣はまもなく廢止に追いこまれてしまった。

「尙方」から自立した鏡工は、最初のうちは設備の整った「尙方」工房を閒借りしたり、その近くで同業の工人たちと提携する形で鏡を製作していたのだろう。しかし、やがてその一部は別の都市に移住して鏡の鑄造をはじめた。「成平」盤龍鏡はその一例で、もとは「尙方」から分立した「龍氏」・「石氏」・「李氏」らと連携していたが、まもなく渤海沿岸の「成平」に移動して盤龍鏡の製作を繼續したのである。また、長江下流域の吳縣を據點とする吳派が成立するのもこの段階である。「柏師」浮彫式獸帶鏡(浙江24)や「吳向里柏師」盤龍鏡(浙江97)をつくった「柏師」は、「尙方」から袂を分かって吳縣の「向里」に移住した鏡工であり、建初八年(83)「吳朱師」畫像鏡(浦上129)もそうした鏡工の創作した作品であったのかもしれない。

鏡工たちの自立が相ついだとはいえ、「尙方」は完全に解體したわけではなかった。分立した淮派の刺激をうけて、「尙方」は銘文526の「嫁入門時，殊大良。夫妻相重，甚於咸央」や銘文527の「二姓合好……女貞男聖，子孫充實」のように儒家の家族觀を宣傳し、紀年銘Bに「尙方造竟，在於民間」というように民間に目を向けた生産をおこなうようになったのである。「尙方」の復興については、稿を改めて論じることしよう。

光武帝のとき南匈奴の呼韓邪單于が歸順し、章帝のときには西域都護となった班超がシルクロードをふたたび開拓した。章和元年(87)には安息國から「師子・符拔」などの珍獸が獻上され、西域にたいする關心が大いに高まっていた。かねてより「尙方」の鏡工房では方格規矩四神鏡や獸帶鏡に四神を中心とする瑞獸を用い、盤龍鏡にも四神に由來する龍と虎が對峙するモチーフがおもに用いられていた。この段階に「尙方」から自立した「龍氏」・「石氏」・「李氏」らも同じようにそのモチーフを盤龍鏡に用いていたのにたいして、「杜氏」・「胡氏」・「呂氏」らはいちはやく西域に由來する「辟邪・天祿」を盤龍鏡の主紋とし、外區に三足鳥や九尾狐などの「奇獸」を採りいれて、市場の歡心を買おうとしたので

ある。これをうけて「龍氏」も圖6-1浮彫式獸帶鏡の主紋に西域に由来する「距虚」「辟邪」「獅子」「天祿」などの「奇獸」（銘文542）をあらわし、「尙方」においても盤龍鏡の主紋を「白虎・辟邪」（銘文525）に改めた。このように四神を中心とする瑞獸から西域に由来する「奇獸」へと轉換したのが、この段階の大きな變化である。また、こうした「奇獸」と並行して、盤龍鏡や浮彫式獸帶鏡に仙人の王子喬・赤松子の圖像が登場したことも、つぎの段階へのステップとして重要である。

第3段階は、浮彫式獸帶鏡に西王母が單獨であられる、およそ和帝（在位88-105）のころである。西王母の圖像は漢鏡4期の方格規矩四神鏡に出現したが、四神の宇宙觀が支配するなかで、陰陽の兩性を具有する西王母は朱雀・玄武を補完するだけであった〔岡村1988〕。しかし、漢鏡5期後半に四神の宇宙觀が動搖すると、陰陽を調和する役割を朱雀・玄武にかわって西王母が一身に擔うようになる。また、圖2-5「杜氏」鏡や圖7-5「池氏」鏡では西王母の眷屬として玉女や王子喬・赤松子らが配されている。もはや四神の宇宙觀は完全に後退し、西王母を中心とする仙界にとってかわったのである。

本稿では詳しくとりあげなかったが、セリグマン舊藏の「朱氏」浮彫式獸帶鏡〔Hansford 1957:A 65〕は、その銘文541が「杜氏」獸帶鏡の銘文530と同じ「珍奇鏡兮」や「成平」盤龍鏡の銘文520と同じ「世間未賞（嘗）有」という特異な語句をもち、外區も「杜氏」鏡と類似する獸紋である。その内區は圓座乳で5區畫に分け、銘文に「白（伯）牙」「子其（鍾子期）」「僑（王子喬）」「誦（赤松子）」を列挙するように、伯牙・成連先生・鍾子期・王子喬・赤松子の圖像を配して伯牙彈琴の故事を圖解している。伯牙はつぎの漢鏡6期に出現する神獸鏡において東王公・西王母と並ぶ主要な神格のひとつとなるから、この段階に伯牙が新たにとりあげられるようになった意義は大きい。

第4段階は漢鏡6期に下る。そのはじめは第3段階に後續するおよそ和帝（在位88-105）後半期であろう。この段階には、兩性を具有して單獨で陰陽を調和していた西王母が、東王公と西王母の陰陽二神に分裂した。信立祥〔2000: 154-159頁〕によれば、山東省長清縣孝堂山祠堂では西壁上部に西王母が描かれているが、對應する東壁にあらわされているのは東方神の風伯であり、東王公ではない。造營後に參拜者がその祠堂に刻んだもとも古い紀年は永建四年（129）で、畫像石の様式から祠堂の造營は章帝・和帝ごろにさかのぼると信立祥は考えている。ちなみに、東王公と西王母とが對になってあらわれる畫像石は、山東省嘉祥縣武氏祠における元嘉元年（151）の武梁祠堂がもっとも早い。鏡では元興元年（105）環狀乳神獸鏡が東王公と西王母の圖像をもつ最古の例であったが、建初八年（83）「吳朱師」畫像鏡（浦上129）が確かであれば、その出現は従來の想定より20年あまりさかのぼる。いずれにせよ、淮派の鏡において東王公と西王母の陰陽二神があらわされたのは、この第4段階になってからである。

本稿でとりあげた淮派の畫像鏡は、それぞれに特徴がある。圖2-6「杜氏」畫像鏡は、第3段階の圖2-5「杜氏」浮彫式獸帶鏡と銘文や圖像の一部が共通し、同じ鏡工による一連の作品と考えられる。盤龍鏡の製作において「杜氏」と連携していた「呂氏」も、この段階に圖4-4「呂氏」畫像鏡をつくったが、その圖像表現は圖2-6「杜氏」畫像鏡とは異なっている。また、龍虎を主紋とする盤龍鏡をつくっていた「龍氏」は、圖6-1浮彫式獸帶鏡において西域に由来する「奇獸」を採り入れたが、それとほぼ同じ銘文をもつ圖6-2畫像鏡では外区の獸紋に「杜氏」「呂氏」鏡と類似する「奇獸」をあらわした。その内区には「杜氏」畫像鏡と同じ四葉紋乳を配するものの、鳥獸と戯れる羽人の圖像や神像の表現はまったく独自のものである。いっぽう、第1段階に自立した「池氏」は獨特の獸帶鏡を連作しており、西王母が單獨であらわされた第3段階の圖7-5浮彫式獸帶鏡をもとに、第4段階には東王公と西王母が對になった圖7-6浮彫式獸帶鏡をつくりだした。外区の日月錢紋をもつ獸紋や鈕座の盤龍紋はそのまま繼承したが、東王公・西王母は畫像鏡の表現となり、獸帶鏡の浮彫表現をもつそのほかの圖像も完全にいかかわっている。このように東王公の出現という宇宙觀の變化をうけて、淮派の鏡工たちは互いに情報を交換しながらも、それぞれが獨自在畫像鏡や獸帶鏡を製作していたのである。

以上のように、「尙方」から自立した淮派の鏡工たちは、獸帶鏡・盤龍鏡・畫像鏡という鏡式を共有しながら、市場のニーズにあわせて新しい意匠の作品をつぎつぎと競いあうように創作していった。それぞれの鏡工は、ひとつの鏡式だけをもっぱら制作していたのではなく、さまざまな圖像紋様や銘文を試行錯誤しながら各種の鏡式に採用していった。漢鏡5期はまさに「尙方」のくびきから自立した鏡工たちがそれぞれの個性を發揮し、鏡が藝術の領域にまで高められた時代であったのである。

参考文献

- 出典略號（五十音順）
 梅原……梅原末治 1942 『漢三國六朝紀年鏡圖說』、桑名文星堂
 浦上……浦上蒼穹堂 2009 『浦上蒼穹堂30周年記念』、浦上蒼穹堂
 開明堂……西村俊範 1994 『古鏡コレクション開明堂英華』、村上開明堂
 巖窟……梁上椿 1940～1942 『巖窟藏鏡』
 故宮……郭玉海 1996 『故宮藏鏡』、紫金城出版社
 古鏡……羅振玉 1916 『古鏡圖錄』
 湖南……湖南省博物館 1960 『湖南出土銅鏡圖錄』、文物出版社
 小校……劉體智 1935 『小校經閣金文拓本』
 紹興……梅原末治 1939 『紹興古鏡聚英』、桑名文星堂
 浙江……王士倫 1987 『浙江出土銅鏡』、文物出版社

- 浙江修訂……王士倫（王牧修訂）2006『浙江出土銅鏡』修訂本，文物出版社
センチュリー……センチュリー文化財團 1992『鏡——その神秘と美』
激秋館……陳寶琛 1930『激秋館古金圖』，北平商務印書館
富岡……富岡謙藏 1920『古鏡の研究』，丸善株式會社
樋口……樋口隆康 1979『古鏡』，新潮社
洛陽……洛陽博物館 1988『洛陽出土銅鏡』，文物出版社
樂浪郡……朝鮮總督府 1927『樂浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第4冊
六安……安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008『六安出土銅鏡』，文物出版社
K……Karlgrén, Bernhard 1934 Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6

日文（五十音順）

- 上野 祥史 2001 「畫象鏡の系列と製作年代」『考古學雜誌』第86卷第2號
上野 祥史 2003 「盤龍鏡の諸系列」『國立歷史民俗博物館研究報告』第100集
梅原 末治・藤田 亮策 1959『朝鮮古文化綜鑑』第3卷，養德社
岡崎 敬 1965 「漢・魏・晉の「尙方」とその資料」『東方學』第31輯
岡村 秀典 1988 「西王母の初期の圖像」『歷史學と考古學』高井悌三郎先生喜壽記念論集
岡村 秀典 1991 「秦漢金文の研究視角」『古代文化』第43卷第9號
岡村 秀典 1993 「後漢鏡の編年」『國立歷史民俗博物館研究報告』第55集
岡村 秀典 2008 a 「漢鏡2期における華西鏡群の成立と展開」『東方學報』京都第83冊
岡村 秀典 2008 b 「中國古代の青銅器生産」『國學院雜誌』第109卷第11號
笠野 毅 1993 「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第13卷，雄山閣出版
榎本 杜人・町田 章 1974 「漢代紀年銘漆器聚成」『樂浪漢墓』第1冊，眞陽社
岸本 泰緒子 2006 「獸帶鏡に關する一考察」『博望』第6號
鈴木 博司 1971『守屋孝藏蒐集 漢鏡と隋唐鏡圖錄』，京都國立博物館
「中國古鏡の研究」班 2009 「前漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第84冊
榎山 滿照 2005 「後漢式鏡地域樣式論再說——後漢桓帝・靈帝代の四川製作鏡を手がかりに」
『奈良美術研究』第3號
林 巳奈夫 1978 「漢鏡の圖柄二，三について（續）」『東方學報』京都第50冊
樋口 隆康 1953 「中國古鏡銘文の類別研究」『東方學』第7號（『展望アジアの考古學 樋口隆康教授退官記念論集』，新潮社，1983年に再録）
林 梅村（川上陽介・申英蘭譯）2005「靈獸・天祿と辟邪の旅」『流沙の記憶をさぐる シルクロードと中國古代文明』，NHK出版

中文（拼音順）

- 陳直 1963 「四種銅鏡圖錄釋文的校訂」『文物』第2期
程紅 1998 「合肥出土、徵集的部分古代銅鏡」『文物』第10期
廣東省博物館 1961 「廣東韶關市郊古墓發掘報告」『考古』第8期
廣西壯族自治區博物館 2004『廣西銅鏡』，文物出版社
廣西壯族自治區文物工作隊・貴港市文物管理所 2006 「廣西貴港深釘嶺漢墓發掘報告」『考古學報』第1期
郭清華 1985 「陝西勉縣老道寺漢墓」『考古』第5期

- 湖北省博物館・鄂州市博物館編 1986 『鄂城漢三國六朝銅鏡』, 文物出版社
劉紹明 1996 「“天公行出”鏡」『中國文物報』5月26日
劉心健・劉自強 1983 「山東蒼山柞城遺址出土東漢銅器」『文物』第10期
山東省文物考古研究所 1999 「山東省臨淄金嶺鎮一號墓」『考古學報』第1期
紹興縣文物保護管理所 2002 『紹興縣文物志』, 浙江古籍出版社
瀋陽市文物考古研究所 2006 「瀋陽市小北街金代墓葬發掘簡報」『考古』第11期
王趁意 2002 『中國東漢龍虎交媾鏡(上)』, 中州古籍出版社
王士倫 1957 『浙江出土銅鏡選集』, 中國古典藝術出版社
信立祥 2000 『漢代畫像石綜合研究』, 文物出版社
熊建華 2001 「帆船紋呂氏鏡小考」『考古』第10期
周世榮 1986 「湖南出土漢代銅鏡文字研究」『古文字研究』第14輯, 中華書局

英文

- Hansford, S. Howard 1957 *The Seligman Collection of Oriental Art*, Vol. 1, The Arts Council of Great Britain
Karlbeck, Oscar 1926 Notes on Some Early Chinese Bronze Mirrors, *China Journal of Science and Arts*, Vol. 4, No. 1
Karlgren, Bernhard 1941 Huai and Han, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 13